

学校英語教育における異校種間連携の推進及び充実 のための研究(中間報告) - 連携への具体化実践事例を系口に -

研修研究部カリキュラム開発課
(外国語教育担当)

研究の概要

本研究は3年計画研究で、本年度はその研究途上の2年次にあたる。今回は、「中間報告」として、「富士地区」の小学校2校、中学校1校、高等学校1校と、「掛川地区」の小学校1校、中学校1校、高等学校1校の合計7校の研究協力校が、地区ごと取り組んだ2年間の実践を基に報告する。

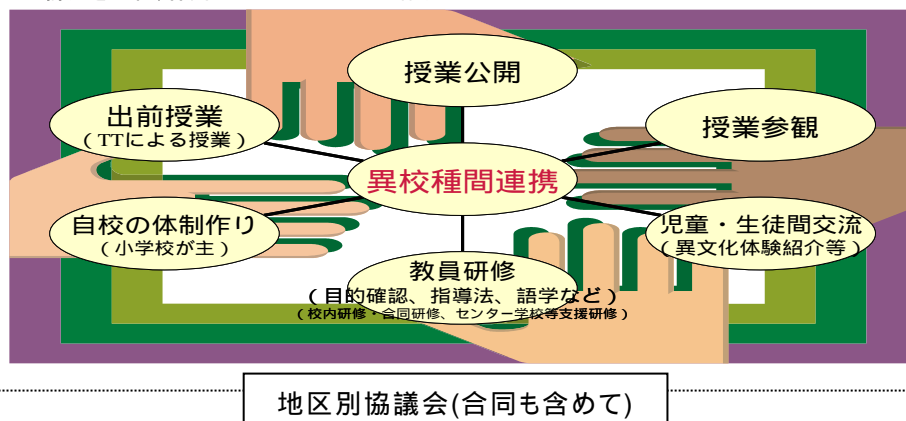
また、本研究は、当課担当がこれまで行ってきた「平成13・14年度『小学校における英語学習活動に関する研究』」及び「平成15・16・17年度『小・中・高等学校における学校英語教育の連携の在り方とその一貫性にかかわる研究-連携カリキュラムの作成を模索して-』」の延長線上に位置する。

今日的課題である「小学校英語」を軸に、小中高の異校種の組織が「連携」に対して、現状の組織を利用してどのように対応できるかを探った報告でもある。何ができて、何ができないか、また、発想を変えることで何ができるのかも含めてアプローチした。平成23年度から、公立小学校5・6年生の必修化が想定される「外国語活動」(英語活動が基本)への実施に向けて、どのような整備ができるのか、また、どのような整備をしていく必要があるのかを、多くの学校や地域に無理なく利用できる提案に向けて有効な手だてを探りたい。

小学校、中学校、高等学校、関係市教委、当センターが協力して様々な連携の可能性を探ったことで、互いのネットワーク作りが進み、人間関係も含めて信頼関係を築けたことは大きな収穫であった。今後、それぞれの学校にとってより身近な協力・支援体制及び学校間連携の強化につなげるためにも、内容、人、制度面から「連携」の可能性をさらに研究していく予定である。

キーワード：

同じ課題を共有、仲間としてのネットワーク作り



目次

研究の目的と主題設定理由	65
1 目的	65
2 主題設定理由	65
研究期間及び方法	65
1 研究期間	65
2 研究方法及び組織	65
(1) 平成18年度(第1年次)・平成19年度(第2年次)	65
(2) 平成20年度(第3年次) 予定	66
研究の内容	66
1 小学校英語を取り巻く状況	66
2 事例報告(富士地区)	67
(1) はじめに	67
(2) 研究の経過報告	68
(3) 小学校英語の取組実践	70
ア 事例 「小中連携『教師と児童』(ティームティーチング授業)」 (5年生「道案内をしよう」) 吉永一小と吉原三中	70
イ 事例 「小中連携「教師と教師」(教員研修) (夏季研修) 原田小と吉原三中	71
ウ 事例 「小高連携『教師と児童』(教材作成支援)」 (高校ALTとのビデオレター共同制作) 原田小と吉原高校	72
エ 事例 「小高連携『教師と児童』(複数教員交流、教員研修)」 (5年生「日本のお米パーティーに招待しよう!」) 吉永一小と吉原高校	73
オ 事例 「小高連携『児童と生徒』(児童生徒交流)」 (海外研修報告-生徒体験談発表) 原田小と吉原高校	74
カ 事例 「小中高連携『教師と児童』(近隣校三校種交流) (3年生「私たちの学校自慢」) 原田小、吉原三中、吉原高校	75
キ 事例 「小小連携『その他』(小学校英語の担当と担当)」 吉永一小と原田小	75
(4) 異校種間連携に対する意見及び考察	77
ア 小学校からの視点で	77
イ 中学校からの視点で	78
ウ 高等学校からの視点で	78
(5) まとめ	80
3 事例報告(掛川地区)	81
(1) はじめに	81
(2) 研究の経過報告	82
ア 1年目の取組	82
イ 2年目の取組	83
(3) 小学校英語の取組実践	84
ア 研究協力校の英語活動(中央小)	84
イ 研究協力校(小)の校内カリキュラム	85
ウ 中学校との連携(西中)事例 / 事例	86
エ 高等学校との連携(掛川東高校)事例 / 事例	87
(4) 異校種間連携に対する意見及び考察	88
ア 小学校からの視点で	88
イ 中学校・高等学校からの視点で	89
(5) まとめ	90
研究「中間報告」としてのまとめ	91
2年間の事例研究 / 成果と課題 / 今後の可能性 / おわりに	
【参考文献等】及び【研究組織】	94

学校英語教育における異校種間連携の推進及び充実 のための研究(中間報告) - 連携への具体化実践事例を糸口に -

研修研究部カリキュラム開発課
(外国語教育担当)

研究の目的と主題設定理由

1 目的

公立小学校で英語活動の導入(H14)が可能になり、数年が経って実施校が急増する中、次課題として学校英語教育におけるきめ細かな異校種間連携への対応が急務である。そこで、より効果的な連携を図るための方策や在り方について研究を推進し、学校現場への提言を目的とする。

2 主題設定理由

当センターでは、平成13・14年度「小学校における英語学習活動に関する研究」(2年計画)を行い、小学校英語の現状把握を開始し、英語活動の実践のための可能性を探った。引き続き、平成15・16・17年度には、「小・中・高等学校における学校英語教育の連携の在り方とその一貫性にかかわる研究-連携カリキュラムの作成を模索して-」(3年計画)を行い、どのような内容を扱うことで従来ある学校英語教育と新たな動き(小学校英語の導入)を融合できるか、授業実践ベースで研究を進め、その具体を模索した。これらの延長線上に位置する本研究は、平成20年3月までに告示される小学校「新学習指導要領」(H23実施)を意識しながら、小学校段階での英語活動が更に本格化し、多くの学校がかかわることが現実のものとして具体化しつつある現在において、極めて重要な視点である「連携」を扱う。小学校英語の導入にともない異校種段階でも影響が出ると予想される本テーマは今日的課題の一つであり、どのように実践の場を効果的につないでいくことができるかを探る必要があると考える。

研究期間及び方法

1 研究期間

平成18年度から平成20年度(3年間)

2 研究方法及び組織

小中高の学校英語教育の連携のために、急増する小学校英語への対応を中心として事例研究を行い、内容、人、制度面からアプローチする。主として次の観点から、研究協力校と共に学校現場に生かせる具体的な方策を研究し、今後の取組への提言を行う。

- ・事例研究による課題の明確化(県内外の異校種間連携システムに着目して)
- ・学校英語教育における学習内容、指導方法、効果的な教材等を含めたカリキュラムの活用に関する検討及び考察(新学習指導要領の研究も含めて)
- ・効果的な地域連携型の人的連携の模索(人材活用及び地域連携コーディネーター<仮称>等の在り方)
- ・今後に生かせる異校種間連携の在り方

(1) 平成18年度(第1年次)・平成19年度(第2年次)

2地区(次ページ「表1」)でそれぞれ研究を展開し、研究協力校間における地域連携型の異校種間連携の実践に取り組み、実践可能な連携の姿を模索する。

表1【研究組織】平成18・19年度 研究協力校(実践)及び関係市教育委員会(助言・協力)

地域(市)	小学校	中学校	高校	関係市教委
県東部 (富士市)	富士市立吉永第一小 富士市立原田小	富士市立吉原第三中	県立吉原高	富士市教育委員会 学校教育課
県中西部 (掛川市)	掛川市立中央小	掛川市立西中	県立掛川東高	掛川市教育委員会 学校教育課

(2) 平成20年度(第3年次)予定

平成19年度までの2年間の研究実践を生かし、可能な限り研究協力校で中心的役割を担った平成18・19年度研究協力員に引き続き協力依頼すると同時に、他地域での研究協力校依頼(単年度対応)を行い、さらなる実践と検証を実施することで、より汎用性の高い提言を目指す。

研究の内容

1 小学校英語を取り巻く状況

図1は、昨年度までの文科省実施「小学校英語活動実施状況調査結果」から国と本県の変化をグラフにまとめたものである。平成14年度より公立小学校でも総合的な学習の時間等で国際理解のテーマの下、扱うことが可能となった英語活動だが、本県の結果をみると調査開始以来、9割以上の学校が実施している。ただし、全国的にも類似傾向があるが、その実施時間は平成18年度の結果も示すとおり、年間4～11時間が大半を占める。平成23年度からの「新学習指導要領」の実施に向け、改訂の主な改善事項の一つ(図2参照)でもある「小学校段階における外国語活動(仮称)」の実施においては、図3でまとめたように小学校高学年で週1時間程度の実施が想定されている。つまり、多くても月1回程度から4倍になると仮定すると、これまで実施してきた学校もその対応は簡単ではないと想像される。また、指導者は、実施において大きな影響を与える要素である。英語を専門としない「学級担任」が中心となって実施することが想定されており、その役割も大きいことから、支援が望まれる。そのため、条件整備は多岐に要求されるが、中でも「支援及び連携体制の構築」は、その対応の柱の一つとなりうると考えられる。現在、研究2年目を終了した時点でもあるため、本稿では「中間報告」として、研究協力校の2年間の足跡を、「富士地区」と「掛川地区」の二つの地域での“実践事例”としてたどることで、その方策への第一歩を確認したい。

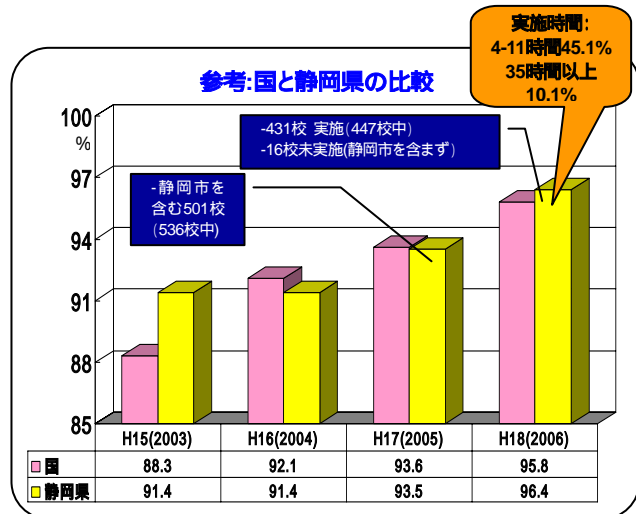


図1 小学校英語活動実施状況

図1は、昨年度までの文科省実施「小学校英語活動実施状況調査結果」から国と本県の変化をグラフにまとめたものである。平成14年度より公立小学校でも総合的な学習の時間等で国際理解のテーマの下、扱うことが可能となった英語活動だが、本県の結果をみると調査開始以来、9割以上の学校が実施している。ただし、全国的にも類似傾向があるが、その実施時間は平成18年度の結果も示すとおり、年間4～11時間が大半を占める。平成23年度からの「新学習指導要領」の実施に向け、改訂の主な改善事項の一つ(図2参照)でもある「小学校段階における外国語活動(仮称)」の実施においては、図3でまとめたように小学校高学年で週1時間程度の実施が想定されている。つまり、多くても月1回程度から4倍になると仮定すると、これまで実施してきた学校もその対応は簡単ではないと想像される。また、指導者は、実施において大きな影響を与える要素である。英語を専門としない「学級担任」が中心となって実施することが想定されており、その役割も大きいことから、支援が望まれる。そのため、条件整備は多岐に要求されるが、中でも「支援及び連携体制の構築」は、その対応の柱の一つとなりうると考えられる。現在、研究2年目を終了した時点でもあるため、本稿では「中間報告」として、研究協力校の2年間の足跡を、「富士地区」と「掛川地区」の二つの地域での“実践事例”としてたどることで、その方策への第一歩を確認したい。

教育内容に関する主な改善事項

新学習指導要領改訂で

1. 各教科等における言語活動の充実
2. 理数教育の充実
3. 伝統・文化に関する教育の充実
4. 道徳教育の充実
5. 体験活動の充実
6. 小学校段階における外国語活動(仮称)

中教審教育課程部会 平成19年9月18日・25日(資料2-1)

図2 新学習指導要領改訂の主な改善事項

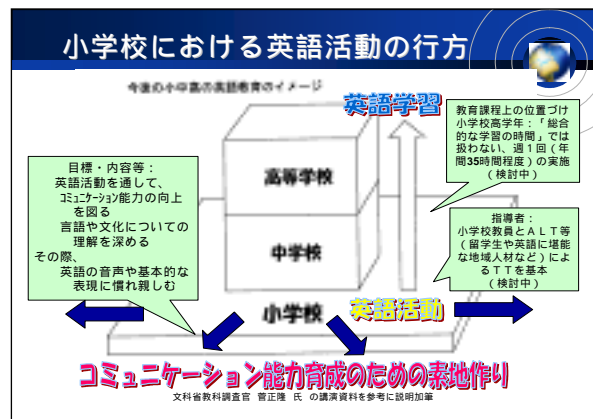


図3 小学校英語と今後の小中高の英語教育のイメージ

2 事例報告（富士地区）

(1) はじめに

ア 研究協力校の概要

富士市では各校において特色ある学校づくりが進み、近年、急速に広まりつつある小学校の英語活動についても、総合的な学習の時間等を用いて学校裁量で実施されている。かつて文科省の指定を受けて以来、実践を積み重ねてきている小学校もあるが、多くの学校は数少ないALTの訪問を心待ちにしており、取組の実態も様々である。

富士市の研究協力校は、国際科を持つ県立吉原高校（生徒数 718 名、18 学級、英語科教員 9 名、ALT 2 名）、富士市立吉原第三中学校（生徒数 293 名、9 学級、英語科教員 3 名）、その中学校区にある原田小学校（児童数 399 名、12 学級）と吉永第一小学校（児童数 492 名、16 学級）である。4 校は、市内東部の丘陵地帯にあり、互いに車で 10 分程度の距離に位置している。学校の教育活動に協力的な地域であり、児童生徒は落ち着いた環境で学んでいる。

小・中学校 3 校の研修テーマの柱は、「他とのかかわり合いを通して、子供たちの思考力や自己表現力を伸ばしていく」ことである。コミュニケーション能力の育成を目標としている英語教育において異校種間の連携を研究することは、各校の研修テーマを具現化し、研修をより深化させる機会にもなると考えられた。指定を受けた二つの小学校は、特に英語活動を盛んに行っているわけではなく、どんな英語活動を展開したらよいのか、そのために何が必要なのかなどの戸惑いもあったが、本研究がそのスタートラインに立つためのよいきっかけになったと考えている。

イ 2年間の取組

(ア) 1年目「何かができる」

まず、指導に困っている小学校を中学・高校で支えるために、小学校を中心に研究を進めていくことを確認した。研究の地区別協議会では、できそうなことや、やってみようことを話し合い、柔軟な発想に基づく様々なアイデアを出し合った。そして、出前授業やチームティーチング、高校のALT派遣、児童生徒の交流、教員研修等、数々の試みを実践するに至った。研究協力員は、コーディネーターとして校内及び校外へ積極的に働き掛け、推進者として授業公開する等、力を発揮した。


(イ) 2年目「悩む・創る・広がる」

2年目には、異動や校務分掌の変化があり、国の方針も不透明であったため、英語活動に重点を置くことに不安が生じる等、研究に揺り戻しが起こった。そこで、小学校の校内研修と地区別協議会を合同で開催し、県総合教育センターの指導主事による講話、授業指導を行い、研究の意義について共通理解を図った。また、国際理解活動の視点を持った授業展開について、苦しみながらも研究を深め、中高の教員やALTの参加を得ながら、英語を使う目的や場面を大切に提案授業を公開した。これらの実践は、今後の授業の在り方を広く他校に示すものとなった。さらに、研究の過程で小学校の英語活動に研究協力校以外の中学・高校からの教員の参加もあり、研究協力校という限定的な連携にとどまらないより自然な交流の広がりが見られた。このように、研究協力員の人的ネットワークが構築され、今後の英語教育における小中高連携の可能性を見いだしたことは大きな収穫であると考えている。

(2) 研究の経過報告

富士地区の研究協力校4校が行った連携実践と小学校での校内の取組をまとめたものが次の表2である。

表2 2年間の連携実践一覧(富士地区)

	小学校と中学校	小学校と高校
教師 と 児童	<p>2校合同研修授業 吉原三中英語科教員2名と原田小教員(学級担任)による英語活動「買い物」の授業(図4)をTTで行った。</p>  <p>図4「買い物」の授業</p> <p>吉原三中英語科教員が10年研修派遣を活用して、英語活動を支援した。</p> <p>吉原三中英語科教員と吉永一小教員(学級担任)が英語活動「道案内」の授業をTTで行った。 *事例</p> <p>吉原三中英語科教員と原田小教員3名による学年合同英語活動を行った。</p>	<p>吉原高校英語科教員及びALTが小学校の授業に協力し、参加した。(原田小と吉永一小それぞれ隔週で行った。)</p> <p>富士東高校英語科教員が10年研修派遣を活用して、TTを行い、小学校の英語活動を支援した。</p> <p>吉原高校ALTが小学校教員制作のビデオレターに出演し、授業の教材作成に協力した。 *事例</p> <p>吉原高校英語科教員及び同校ALT2名と、吉永一小教員(学級担任)による英語活動「お米パーティー」を5年生の授業で実施した。 *事例</p> <p>吉原商業高校(協力校以外)英語科教員の10年研修派遣にあわせてALTも研修として英語活動の支援を体験した。</p>
	小学校と中学校と高校	
	<p>吉原高校教員、吉原三中教員、原田小教員、富士市ALTの日程を調整し、4T授業を行った。 *事例</p>	
児童 と 生徒	<p>原田小6年生児童が、入学説明会に参加するために吉原三中を訪問し、授業参観などを行った。</p>	<p>吉原高校国際科生徒、教員、ALTがゲストティーチャーとして原田小6年生の授業に参加した。 *事例</p>
教師 と 教師	<p>吉原三中英語科教員2名、富士市ALT3名を講師に迎えて、小学校教員のための英語指導講座を夏季研修として行った。 *事例</p> <p>小中合同研修会 吉原三中の英語の授業を原田小全職員が参観した。</p>	<p>英語表現や外国、外国人について、主にファックスや電話で高校英語科教員に質問をした。</p>

表中の事例 から は、70 ページから 7 ページにわたり具体的に紹介する。

その他の連携	小学校内での取組
<p>【小学校と小学校】 *事例</p> <p>吉永一小と原田小で互いに英語活動を参観し合った。</p> <p>連絡を取り合い、アイデアや課題、悩みを共有した。</p> <p>【小学校と保護者】</p> <p>スリランカよりのホームステイ留学生を学校に迎えて交流会を実施した。</p> <p>【小学校と市教委】</p> <p>英語活動の研究授業に際し、市教委にて指導主事の助言を受けた。</p> <p>富士市 A L T がビデオレターにより活動支援を行った。</p> <p>「小学校教員のための英語指導講座」(夏季研修)において、富士市 A L T 3 名が吉原三中英語科教員 2 名とともに講師として原田小教員を指導した。(図 5)</p> <div data-bbox="276 1402 694 1697" data-label="Image"> </div> <p style="text-align: center;">図 5 英語指導講座</p> <p>【小学校と県総合教育センター】</p> <p>県総合教育センター指導主事が、小学校校内研修会において、模範授業、国際理解活動についての指導助言、連携事業についての説明などを行った。</p>	<p>他教科、領域とのつながりをもたせて年間指導計画を作成した。</p> <p>校内研修を活性化するために、英語活動を通して研修テーマに迫った。</p> <p>校内の英語活動及び異校種間連携についての共通理解を図った。</p> <p>月 1 回の英語活動便り「えんじょい・いんぐりっしゅ」で、情報や動向を発信し、また、各学年の実践を紹介した。担当が発信することに加えて、学年で実践することを意識化するために、学年計画作成の手順や手だてを明確にした。</p> <p>職員会議を利用して、月に 1 度の当番制による英語活動についての学年提案を実施した。(図 6)</p> <div data-bbox="884 1249 1302 1570" data-label="Image"> </div> <p style="text-align: center;">図 6 職員会議における学年提案</p> <p>英語コーナーへ教材を持ち寄り、教員間で共有化し、教材を精選した。</p> <p>外部講師を招いて、教員対象の英会話研修会を実施した。</p> <p>委員会児童の運営による昼の校内放送の英語コーナーに、市 A L T に出演を依頼した。</p>

(3) 小学校英語の取組実践

ア 事例 「小中連携『教師と児童』(チームティーチング授業)」

(5年生「道案内をしよう」) 吉永一小と吉原三中

研究1年目の10月、小学校の校内全体研修として中学校との連携を図った英語活動の授業を行った。どのように英語活動を進めていくべきか多くの教員が迷っている中で、英語活動に対する共通理解を図ることを目的とした全体研修であった。

(ア) 中学校教員との打合せ

授業は、中学校の英語科教員をT2に迎えてTTで行った。しかし、事前の打合せをする時間がなかなか取れなかったため、次の方法で連絡を取り合った。

- ・授業10日前 ... 当日の日程をファックスで伝える。
- ・授業1週間前 ... 指導案と派遣依頼の文書を中学校へ提出する。
- ・授業前日 ... 訂正した指導案をファックスし電話で細かな点を依頼する。
- ・授業当日 ... 開始15分前には来てもらい、10分間の最終打合せを行う。

さらに、事後研修会に参加し、小学校と中学校で意見交換を行った。

(イ) 実際の授業

授業では、子供たちにとって、中学校の先生との初めての出会いである。あいさつを交わした後、自己紹介を行った。その中で、“I'm from ~.”という表現が出てきたので、“Where is the junior high school?”と質問をし、小学校からの道順を中学校教員に話してもらった。その後、“Left and Right”という歌を全員で歌い、左右の言い方を練習して、実際に道を聞かれた時の答え方を教員が会話で実演して見せてから、道順を尋ね合うゲーム(図7)に入った。ゲームは、子供たち一人一人がなるべく多くの会話を楽しめるように、地図を持って自由に歩き回る形式で実施した。T2である中学校教員はpolice officerとして、子供たちが会話で困った時に言い方を確かめられるようにした。子供たちはゲームの中で、一度はpolice stationへ行ってpolice officerに単語の発音を確かめていた。学校を中心に、周辺の8カ所の場所に行けるように道順をたずねるゲームにしたことで、多くの友達や教師に声を掛ける姿が見られた。いつもは自分からかかわることが苦手な子供も、大きな声で自分から話しかけていた。

子供たちの感想

- ・中学校の先生が来て緊張したけど楽しかったです。
- ・英語が好きになりました。
- ・ゲームで14人と会話ができてうれしかった。
- ・ゲームの中で、全部の場所に行けてよかった。



図7 道順をたずねるゲーム

T2(中学校教員)の感想

- ・授業内容について小学校側で準備をさせていただいたので、自分の授業の調整だけですぐに訪問することができた。
- ・ファックスで事前に内容の確認ができていたので、近隣の学校同士でこの程度の負担であれば、今後も実施可能ではないかと思う。

参観者(小学校教員)の感想

- ・これまで自分自身が英語活動の授業を行うことに抵抗を持っていたが、このように、英語を楽しむ、コミュニケーション能力の育成を目指していけばよいことが分かった。
- ・中学校の先生がT2で入ることで、英語の正しい発音が聞けるため、子供たちは一生懸命に聞いていた。来てもらうことはとても有効であった。
- ・発音の指導以外で助けてもらえることは何かを考えていきたい。

イ 事例 「小中連携『教師と教師』(教員研修)」
(夏季研修)原田小と吉原三中

研究1年目は、それまで英語活動を年間に1～2時間程度ALTが派遣された時に実施するのみだった原田小教員にとって、「英語」と聞いただけで尻込みしたくなるような状況だった。とにかく英語を口にする時間を持ちたい、1時間の英語活動をするために、何でもいいから手掛かりがほしいという思いから、吉原三中英語科教員と市ALTに夏休みの職員研修の講師を依頼して、夏季研修会(図8)を実施した。日程と活動内容は下の表3に示すとおりである。



図8 夏季研修会

尻込みしていた英語活動が、子供の立場で学ぶとこんなにも楽しいものかという発見につながった。このことが、この研修会の何よりの収穫であった。各グループの発表では、小学校教員ならではの工夫や楽しい表現が見られ、参加した教員は今後の活動への手掛かりを得ることができた。この研修会は、原田小の強い希望で研究2年目の今年度も実施された。講師となる中学校教員と市ALTの準備がさらに周到なものになり、小学校英語にすぐに使える多くの活動例を体験することができ、大変有益であった。グループ発表の際には、各教員が研修の成果を印象的に伝えるための工夫を凝らし、発表の準備も大変楽しいものであった。また、原田小の研修テーマである「関わり、表現」につながる手ごたえも実感できた。

表3 研修会の日程と活動内容

8月10日	13:30	全体会	グループ活動...少人数による、講師交代あり あいさつ、歌、ゲーム、発音、チャンツ、ロールプレイング(買い物、レストラン、デパート、学校、駅など) 全体でミニ発表
	13:40	グループ活動	
	15:00	準備練習	
	15:30	成果発表	
	16:00	閉会	
8月11日	9:00	全体会	グループ活動 歌、ゲーム、会話、活動作り(図8) 全体で作成した活動の提案
	9:10	グループ活動	
	10:00	活動作り及び練習	
	10:40	提案発表	
	11:30	閉会	

主なグループ活動の内容

- ・“What's this?” “It's a ~ .”を使って、ある物の一部だけを見て何かをあてる活動。
- ・“Can I try this on?”などを使って買い物の場面のスキットを作る活動。
- ・引いたカードを自分は見ずに他の班員に見せて、“Is this ~ ?”の表現で質問し、描かれているものは何かをあてる活動。
- ・軍艦ゲーム。(相手が表の中のどのマスに軍艦を持っているかを当てるゲーム。自分が推測するマスを相手に伝えるために、表の中のフレーズを使って英文を言わなければならない。)

参加中学校側から

- ・研修2年目ということもあり、小学校の先生が英語を使おうという意欲が大変強いことが印象的だった。
- ・小学校の先生は、どの先生も役者で、授業の中で実際にその活動を行えば、きっと児童は「英語で話したい」「やってみたい」と感じると思う。
- ・当日は小学校の担当者によって、少人数で活動するための工夫された班分けがなされており、英語に向き合わざるを得ない環境の中での積極的な参加となった。
- ・準備に当たっては、事前に明確な目的が示されていたため、指導案を考えやすく、普通の授業で行っているような活動を小学校の先生に体験してもらう機会を提供できた。
- ・このような研修の機会は、指導内容を検討する場としても活用できるかもしれない。

ウ 事例 「小高連携『教師と児童』（教材作成支援）」

（高校ALTとのビデオレター共同制作）原田小と吉原高校

研究2年目の3年生の英語活動は、表4のようにあいさつと自己紹介から始めて、世界の人々と出身国や好きな食べ物について話し合う活動につなげていった。国際理解の一環として、外国人とコミュニケーションを図る過程で、自分の好きな食べ物はどこの国から来たのかに目を向け、外国から来た食べ物が身の回りにたくさんあることに気付かせることを意図した。使用する英語として、第5時の中心となる“What food do you like?”という文は初出表現であるので、できるだけスムーズに導入したいと考えた。そこで、ALTが同じ表現を使って会話をするビデオ（図9、10）を提示することにより、子供の興味を喚起し、会話の練習に発展させていくことにした。前年度に英語活動の支援に来てくれた高校のALTのオーニャ先生と学級担任とが会話する映像は、子供たちの関心を高め、よい動機付けとなった。打合せの難しさもなく、担当の高校教員を通して活動の意図を伝えてあったので、教材をALTに用意してもらうこともできた。

表4 3年生の英語活動

	活動内容と使用表現
1時	・あいさつと簡単な自己紹介の仕方を知る。・ペアチェンジして、あいさつと自己紹介をする。 ・Hello! My name is ~ . Nice to meet you . I like ~ .
2時	・英語活動の時間に使うネームプレートを作る。 ・What's your name? My name is ~ .
3時	・様々な国の名前や言い方に慣れる。・世界地図を使い各国の位置や国旗について知る。 ・America. France. Germany. Korea. China.
4時	・出身国の尋ね方と答え方に慣れる。 ・Where are you from? I'm from America. Where is America? Here.
5時	・出身国や好きな食べ物についての尋ね方と答え方を相互に試してみる。 ・Where are you from? I'm from Japan. What food do you like? I like sushi.
6時	・様々な国の出身者になり、あいさつ、出身国、好きな食べ物について話し合う。 ・Bonjour. Ni hao. Where are you from? What food do you like? I like noodles.



図9 ビデオレターの画面(1)

高校側から(1)

小学校から、ALTの出演するビデオレターの撮影を依頼されて高校側が行った準備は、ALTへの連絡と日程等の調整が主なものだった。撮影のテーマを説明し、ALTに話してほしいと依頼されたことを伝え、必要であれば、小道具も準備してもらった。小学校の先生方が高校に来校して撮影を行った際には、場所の確保や事務室に来客対応の依頼をした。

高校側から(2)

撮影を実施するためには、ALTの勤務時間内で、かつ小学校の放課後の時間帯という条件があり、設定した日時は、高校での全校一斉テストの採点指導の時間と重なっていた。そのため、高校教員は立ち会わずに、小学校主導で撮影を行った。既に面識があったためコミュニケーションもスムーズに行われ、ALTの持ち味を生かしたビデオが撮影された。ビデオによる小学校の授業への参加は時間等の物理的な制約が解消されるという利点がある。



図10 ビデオレターの画面(2)

エ 事例 「小高連携『教師と児童』(複数教員交流、教員研修)」

(5年生「日本のお米パーティーに招待しよう!」) 吉永一小と吉原高校

研究2年目の11月に、高校のALT2名と英語科教員1名を招いて「日本のお米パーティーに招待しよう!」の授業(図11)を行った。この授業は、富士市一斉授業研究会において、総合的な学習の時間における国際理解活動の取組として公開された。

(ア) 子供たちの願いから生まれた活動

吉永一小の5年生は、学校のビオトープの田んぼで米作りを行った。お米パーティーを計画する過程で、「おいしい日本の米料理を外国の人にも食べてもらいたい。」という願いが生まれてきた。「外国の人を招待して、一緒に作りたい。」「日本のよさを伝えたい。」と、子供たちの思いは膨らんでいった。そこで、高校のALTを招いて、今まで習った英語を使って日本の料理を伝える活動を組むことにした。

(イ) ALTの活用方法

今までの授業では、英語や外国について教えてもらうことが主で、子供たちから発信することは難しかった。しかし、外国について知るだけでなく、日本の文化についても伝えられることが、国際理解の上では非常に大切なことである。そこで、子供たちの思いを実現するため、高校のALTにパーティーへ来てもらえるように依頼をした。高校では一年間でALTが交代し、夏には日本についてあまり知らないALTが来るので、子供たちが日本文化を伝える対象としては、最適であると考えた。

ALTには、授業では英語だけで会話をし、子供たちと一緒ににおにぎり、お茶漬けや納豆ご飯などを作ってもらった。英語を話す必然性があり、話さなければならぬ場を設定することで、子供たちは、何とか自分の気持ちを伝えたいという強い思いから、知っている単語を使いながら、料理の作り方などを必死に伝えていた。

(ウ) 高校側から

高校側は子供たちの英語力やこれまでの英語活動の状況を把握していないので、小学校主導で準備を進めた。事前には、小学校の授業担当者から送られた授業案や連絡のファックスを読む程度だったが、当日は、授業直前に指導者4名で留意点を確認した。短時間であっても授業前の打合せは不可欠である。

授業では、英語の歌を歌ったり、初対面の人とあいさつし握手を交わしたり、お米を使った料理の紹介をしたりする場面で、子供たちは事前の活動で学んできた英語を一生懸命使っていた。慣れ親しむことを目標とする英語表現は、ほとんどの子供が使えていた。振り返ると、事前準備のために、授業担当者がかけた多くの時間と労力がうかがえる授業であった。授業の中で英語表現に関する質問に答えることで、高校教員として有益な支援ができたものと考えている。

子供たちの感想

- ・ドキドキしたけど、自分が話したことをやってくれたり理解してくれて、うれしかった。
- ・日本の料理をおいしいと言って食べてくれてよかった。
- ・とても楽しくて時間があっという間にすぎってしまった。



図11 お米パーティーでの交流

授業者の感想

- ・子供たちに英語を話す必然性を与えたことで、一生懸命伝えようとする姿が見られた。
- ・今までの英語活動の成果が出せたことは、子供たちの満足感にもつながった。
- ・子供たちが、日本のよさを改めて感じることもできた。
- ・連携があって初めて実現した授業であった。

オ 事例 「小高連携『児童と生徒』(児童生徒交流)」

(海外研修報告 生徒体験談発表)原田小と吉原高校

研究1年目の12月、6年生のクラスで吉原高校2年生の生徒とALTによる訪問授業(図12)を行った。めったにないチャンスと考えて1時間の流れを作りすぎたこと、国際理解をねらうあまり、生徒との交流、ALTとの交流と欲張って時間が足りなくなったことなど、反省点も多い。しかし、小学生にとっても高校生にとっても有意義な英語活動をと考えて、今回の交流を高校側の主導で進めた意義は大きい。将来の進路希望が幼稚園の先生であったという生徒の「小学校の先生もいいな。」との言葉に、教員志望の生徒と小学生の交流の可能性も感じられた。また、事前打合せや時間調整の難しさ、来校のための交通手段をどうするかなど、今後の課題も見えた活動であった。

授業内容

- 1 “Shake hands greeting”をして仲よくなるよう。
- 2 オーストラリア ×クイズをしよう。
 - ・オーストラリアの子供たちに人気の遊びは？
 - ・流行しているキャラクターは？
- 3 オーニヤ先生に、ジェスチャーで日本のものを伝えよう。
- 4 お姉さんお兄さんから、留学の話を聞こう。



図12 高校生とALTによる小学校訪問授業

高校側の考察

- ・ 連携研究の一環として初めて高校の生徒も参加した授業を行って、小学生にとっても、高校生にとっても貴重な経験であったと言える。かわる人数が増えるほど、事前の準備も増え、教員のみが、英語活動に補助で参加するときよりも、事前のやり取りの回数も多くなった。
- ・ 今回のような盛りだくさんの活動を円滑に行うには、やはり経験豊富な教員が十分に準備をして臨む必要がある、「あまり事前の準備を要しないで行う」という共通理解で行ってきた連携の活動の中では、これまでに以上に難しさを感じた。簡潔な言葉で的確に理解を促したり、動きの多い活動で生徒を動かす難しさを感じるとともに、小学校の先生の技量に改めて感心した。
- ・ 高校生がいきいきと児童とかわることができ、発表の準備や児童との交流を通じて、これまでの自分たちの英語学習をより深めることにもなった。進路意識を高めることもでき、キャリア教育的意義も感じられた。小学生にとっても、高校生が教室に来て、生で海外での体験を紹介するということが自体が意義のある体験となったこと、遠く離れた海外での生活に興味を喚起できたことは間違いないと感じられた。

高校生の感想(抜粋)

- ・ 元気で明るくいいクラスだと思いました。授業に積極的に参加したり、話しているときも興味を持って聞いてくれたりしたので、話にも力が入ってしまいました。このクラスは、英語が好きなんだなあととても感じました。ぜひこの中からいつか吉高の国際科に来てくれる人が一人でも多くいてくれるといいです。とても貴重な時間をすごしました。
- ・ 写真を見せたら、小学生が「すごい!」とか「かわいい!」等反応してくれ、笑顔を見て安心したし、素直にかわいいなって思った。終わった後も持ってきたアルバムを「見せて!」と寄ってきてくれて、たったの1時間なのにすごく仲良くなりました。最後まで玄関まで見送ってくれて感激しました。将来、保育士になりたいと思っているので、本当に良い経験ができました。
- ・ 最初は緊張してどう接すればいいかわかりませんでした。最後には少なからず仲良くなれたと思いました。自分たちのオーストラリアでの体験を伝えるのはとてもいいことだし、海外ってこういう所なんだって少しでも興味を持ってくれたらうれしいです。少ない時間でも、子供たちとの時間はいい体験でした。新鮮な気持ちになることができ、また新たな自分を見つけられたと思います。こういう機会をこれからも続けていけたらいいと思います。
- ・ 自分の体験を小学生に伝えることで、少しでも参考になればよかったです。小学生にも、私がしてきたようなすばらしい経験ができてから幸いです。今回このような貴重な体験をさせてくれてありがとうございます。また原田小に行きたいです。

カ 事例 「小中高連携『教師と児童』(近隣校三校種交流)」

(3年生「私たちの学校自慢」)原田小、吉原三中、吉原高校

吉原三中英語科教員の10年研修の一環としての来校と、市ALT、吉原高校英語科教員の派遣日が重なった偶然を生かしたいと、担任を含めての4Tでの活動を組んだ。4名の教員がかかわるので、内容をシンプルなものにして、簡単な流れを事前にファックスで連絡した。準備として、担当者それぞれの学校の特色(ALTの場合は国)についてのカードを作成し、子供の人数分を用意した。

当日の授業では、子供たちは、“What is this? It is ~.”の表現を使って、四つのコーナーで待つ教師と1対1で会話をした。日頃、支援の教師や外国人ALTなどと進んで英語でのコミュニケーションをとる機会を逃しがちな子供も、四つのコーナーを回ってカードを集めて来るという設定の下で、生き生きと活動していた。原田小の自慢クイズでは、何度も繰り返して慣れた“What is this?”の表現を使って先生方に質問をし、ジェスチャーを交えながら英語で正解、不正解を伝える活動を楽しんだ。

高校側の感想

まず小学校で驚いたのは、子供たちの元気よさと新しいことに興味を示す眼差しである。中学・高校の先生の話の一つ残らず聞き取ろうと、我々の英語の自己紹介に真剣に聞きいっている姿が印象的であった。子供たちはALTや我々の発音をそのまま真似をし、会話練習の際に使っていた。児童の英語活動に対する高い関心や、音で言語を習得するのに優れた年齢にあることを加味して、小中高の教員が連携をすれば、より充実した授業ができると感じた。

ALTの感想(日本語訳抜粋)

この授業において、子供たちは、自分たちの担任の先生がネイティブスピーカーと自然に英語を話しているのを見て、英語を学ぶことに一層興味や関心を持てたのではないかと。複数の教員と英語で話す機会を持つこともできた。ただ、子供たちの注意が同時に複数の教員に向けられるので、注意散漫になりがちで、授業の進行を難しくしたり、効果を半減させたりする恐れがあることも考慮すべきだろう。

キ 事例 「小小連携『その他』」(小学校英語の担当と担当)吉永一小と原田小

学校の規模や地域の特色が似通っている隣接校が、同じような実態で英語活動をスタートしたため、ことある毎に相談し合ったり話し合ったりすることで、互いに大きな助けとなった。このような小学校と小学校の連携も重要な要素であると考えられる。

(ア) 吉永一小側から

本研究を進めていくにあたって最も大きな支えとなったのは、同じ悩みを抱え、同じ研修を行っている原田小の存在であった。英語活動について分からないことが多い状況で、校内研修の進め方や活動事例などについての情報を交換し合うことで、次ページの表5にあるように、自校の活動を発展させていくことができた。

(イ) 原田小側から

英語活動にほとんど取り組んで来なかったところへの研究指定で、連携への見通しはもちろん、英語活動そのものについてのノウハウが全くない中でのスタートだった。だからこそ、同じような状況の吉永一小の存在は大きかった。担当教員として課題とを感じるものが似通っていることに度々驚かされた。校内研修を参観し合ったり、研究会などで現状を話し合ったりする機会が持てたのは、近隣校のよさである。2年間における両校の実践が似ているのは、連携への共通理解の証しである。

表5 富士市立吉永第一小学校 「総合的な学習の時間」(例)-5年生 年間計画

【資料】		「富士市立吉永第一小学校 5年生 総合的な学習の時間 年間計画」	
<p>学年の主なねらい</p> <ul style="list-style-type: none"> 自分の住んでいる地域や日本・世界の環境について自己課題をもって調べ、世界規模で環境問題が起きていることを理解し、調べたことをわかりやすく伝えたり、自分たちにできることを考え実践したりする。 稲の栽培や米の調査を通して、食べ物の大切さ・食料生産の大変さ・米と日本人の生活との深い結びつきや外国の文化との違いに気づき、日本の文化のすばらしさを見つめ直す。 英語を使ったゲームや歌などを通して、英語を使って身近な事柄について伝えたり、外国の文化を理解したりしようとする。 			
月	主な行事と教科との関連	総合的な学習の時間	国語理解活動題材名
4	国語「出会う・伝える」 理科「植物の発芽と成長」 「メダカの誕生」	丸火の自然 ← 比べてみよう → 吉永の自然 吉永一小の自慢 ビオトープについて仁藤さんから話を聞こう	新しい友だちと仲良くなるよう 1 英語の名札を作ろう。
5	行 みどりの学校 社会「稲作にはげむ人々」 国語「谷津干潟の生き物たち」	田んぼでお米を育てよう バケツ稲を育てよう。 田植えの仕方を知ろう 田んぼの管理の仕方 環境に優しい農業 ビオトープに優しい稲作り	2 友だちになろう。 (自己紹介) 3 あいさつをしよう。 4 今日の調子を伝えよう。
6	社会「これからの食料生産」 理科「花から実へ」	稲が黄色くなってきたよ。 どうしたらいいのかな 夏休みも調べてみよう。 市役所環境政策課 エコチャレンジ 奉仕作業 ビオトープの修理をしよう	5 あいさつゲームをしよう。 みどりの学校について伝えよう 6 みどりの学校での活動の言い方を知ろう。 7 楽しかったことを伝える練習をしよう。 8 一番楽しかったことを伝えよう。
7	国語「ポスターセッションを開こう」 理科「天気の変化」	田んぼの管理を続けよう。 稲を観察しよう。 花粉を観微鏡で見よう。 地球の環境はどうなっている？ 調べてみよう 地球温暖化 自然破壊 ゴミ問題 リサイクル	お誕生日はいつ？ 9 月の言い方を知ろう。(誕生日) 10 11 日の言い方を知ろう。 12 自分の誕生日を伝えよう。
8	家庭「料理って楽しいね」	スズメよけを作ろう かかしを作ろう	サラダを作ろう 13 サラダに使う野菜の名前を覚えよう。 14 サラダに使う野菜を買いに行こう。 15
9	社会「暮らしを支える情報」 社会「工業生産を支える人々」	稲刈りをしよう 稲刈りの仕方を教えてもらおう 脱穀の仕方・精米の仕方調べよう お米料理について調べよう	16 サラダを作ろう。 17 作り方を話そう。 18 自分だけのサラダを紹介しよう。
10	社会「メディアを作ろう」	お米パーティーをしよう 日本の料理パーティー 外国の料理パーティー	日本と世界の料理 19 日本のお米料理について伝えられるようにしよう。 20 日本のお米料理について紹介しよう。 21 外国の料理について知ろう。 22 料理をしてみた感想を伝えよう。 23 24 25 26
11	国語「発表会を開こう」 国語「意見文を書こう」	日本のお米料理を伝えよう 外国の料理を知ろう。	
12	道徳「ケリーさんの自由」	発信 ・ポスター ・パンフレット ・新聞 ・劇・本 ホームページ ・ホームページ ・ホームページ	世界と日本を楽しもう 27 外国の文化・クリスマスの表現について知る。 28 クリスマスにちなんだゲームをしよう。 29 お正月遊びを楽しもう。 30 やり方を伝えよう。
1	社会「住みよい暮らしと環境」	実行 自分たちができることを実行しよう	世界の国々の環境 31 環境について調べた国について伝えよう。 32 環境について調べた国の国旗を知ろう。 33 どここの国に行ってみたいか話そう。 34 吉永の環境について話そう。 35
2	・環境を守る ・地球の環境レポートを書こう	省エネしよう！ エコチャレンジを続けよう 自然を増やそう 緑化活動 花の会への参加 ゴミを減らそう！ リサイクルグッズを作ろう！	
3	家庭「不要になったものを生かそう」	広げる みんなにも呼びかけよう！ 環境CMを作って全校に放送しよう！	

(4) 異校種間連携に対する意見及び考察

ア 小学校からの視点で

(ア) 小学校における英語活動の成果

本研究の指定を受けた時の教員に共通する思いは、何から手をつけてよいのかという戸惑いであり、課題は自分の英語力にあるとして、そのための研修を最優先に挙げる教員が多かった。しかし、2年間の取組を通して、そのような英語に対する姿勢が大きく変化した。個人の英語力の欠如はそれほど英語活動の指導の妨げとはならないことが認識されるようになった。英語を使うからこそ可能である、伸び伸びとしたコミュニケーションの方法があることを小学校の教員自身が実感するようになったためである。英語に対する抵抗感が薄れ、教材を自分たちで作るなど、活動の幅も広がってきた。また、「英語が大好き」という子供が増え、初対面の先生とも抵抗なくコミュニケーションを楽しもうとする姿勢が身に付いてきている。普段はコミュニケーションをとることが苦手な子供も大きな声で自分から話しかけることができるようになった。

(イ) 中学校・高校との連携の成果と課題

英語の専門家ではない小学校教員が、1時間の英語活動の準備にかかる労力は膨大なものである。身近にいて相談したり、支援を依頼したりできるような中学や高校の教員の存在そのものが、大きな意味を持つものである。今後英語が必修になったときのことを考えると、大変心強い。日本人であり、なおかつ英語が堪能であるということで、抵抗なく相談することができた。また、専門的知識や技能を持つ英語科教員が小学校の英語活動の授業に参加することは、小学校の教員にとっても子供にとっても大変意義がある。指導案作りの段階から分からない英語表現を聞いたたり、授業の中でもその場にふさわしい表現を尋ねたりすることができた。子供たちは、専門の教員が話す発音をととてもよく聞き、生き生きと活動をすることができた。しかし、課題は、事前の打合せを行う時間を生み出すことや日程の調整が難しいことである。そのため、年間計画の中のどの授業に英語の専門の教員がT2として入ることが効果的かを、計画的に考えていく必要もある。

(ウ) 今後の連携の可能性

研究が進むにつれ、10年研修で来校した中学校教員や高校教員とのチームティーチング、市ALTへの校内研修の講師依頼、ホストファミリーとなった子供の家庭と連絡をとって留学生と交流を持つなど、活動に広がりが見られた。研究2年目の12月には、10年研修の一環で学校から一番近い高校の英語科教員とALTが2日間来校した。小学校で子供たちがとても楽しく英語活動を行っている姿に感動し、今後も機会があったらぜひ交流をしたいと話してくれた。小学校段階の子供たちの様子を知ることは高校の教員にとっても、大変参考になるとのことだった。今後、市から派遣されるALTだけでなく、近隣の高校からも英語の専門の教員やALTが来ることが広く可能となれば、小学校としては益々心強い。連携に関する研究を行っていることを知り、今回、学区にある別の高校のALTと英語科教員が小学校との交流に関心を持ってくれたことも、今後の幅広い連携につなげていくための大きな成果であった。是非、研究終了後もさらなる可能性を探っていきたいと考える。

イ 中学校からの視点で

(7) 中学校における生徒の変化の表れ

これまでの本校生徒は、自己表現に自信がなく、積極的な生徒はほんの一部であった。しかし、19年度は英語の授業でのスキット作りにおいて、教科書や例文通りのスキットを作る生徒はほとんどおらず、一工夫してオリジナルなものにしようとする生徒ばかりである。この変化は、18年度小学校で英語活動を経験した生徒たちであることと無関係ではないと思われる。小学校での授業において「英語は楽しい。」という印象や、「どんどん英語を話したい。」という意欲を持ち、英語に対する肯定的な気持ちを持ったことが、そのまま中学校に引き継がれているようである。今後、各校種でのカリキュラムが確立されていけば、小学校で英語好きになった生徒が、中学校でさらに基礎を固めるといった連携が上手くなされていくはずである。

(1) 小中連携のために必要なことは何か

本研究にかかわるまで、小学校での英語活動の状況や異校種の教員がどんな悩みを抱えているのかについて深く知る機会がなかった。しかし、英語活動で何ができるかを高校の教員とともに話し合い、考えながら進めることで、大変勉強になった。今後、中学校の現状や今回の実践を踏まえた上で、近隣の学校との連携を継続的に実施することを考えると、時間割編成時に、小学校と中学校で英語の授業時間を調整し、双方の教員にまたがった時間割を作っていくことが一つの可能な手だてであると思われる。また、ある特定の授業に限って参加を要請された場合は、早めに連絡を受けていれば、できる範囲で自校での時間割調整をして訪問することは可能である。その意味では、夏季休業中の教員対教員でかかわる校内研修への援助は、平日の授業参加に比べれば無理は少なかった。

また、連携校同士の日常的な情報共有や意思疎通の必要性を感じた。実際のところ、吉原三中は、原田小とスポーツでの交流や合同で授業研究を行っていることもあり、英語活動での連携以前の下地があることが気持ちの面での抵抗感を少なくしたと言える。実際に連携を実施する際には、お互いが気軽に相談や連絡できることが成否の鍵になるとと思われる。

(2) 小中連携の意義

中学校の教員が、連携によって小学校の児童を理解することで、中学校入学後の指導につなげていくことは可能である。また、中学校側が小学校での英語教育の内容をさらに詳しく理解していれば、それを踏まえたうえで中学校の英語の授業を計画することができるのは明白である。将来的には小学校、中学校さらに高校までを見通した英語教育のシラバス作りをしていけば、効率的かつ効果的な授業が各発達段階で展開できるのではないだろうか。

ウ 高等学校からの視点で

(7) 今までの取組で見えてきたもの

研究1年目は研究協力員がALTとともに10月から12月にかけて全5回（原田小3回、吉永一小2回）、2年目は10月終わりから11月下旬にかけて英語科職員6名とALTが全8回（原田小2回、吉永一小6回）、T2として小学校での英語活動に参加した。両小学校では、先生方の大変な苦勞により、定期的な英語活動が実施

されていた。指導案や教具を共有するなど、教員間で協力して取り組みながら、学校独自の授業スタイルを確立しつつあった。チームティーチングを行う場合、本来ならば事前に指導案を基に内容確認及びチェックをお互い入念に行うべきであるが、多忙な中であって、簡単な打合せのみで授業が行われることもあった。同じ題材でもクラスや担任によってやり方も異なり、ゲームや歌も高校の英語の教員が知らないものばかりであった。そのため、支援する場合には、事前に小学校段階の英語を子供に対して指導するための知識を多少なりとも持つ必要があると感じた。

ただし、高校のALTが、小学校の学級担任が計画した、言わば手づくりの英語活動に参加することの意義は大きいと感じた。学級担任はそれまでの活動の積み重ねを基に授業を組むことで、子供たちが自分たちの学んできた英語がネイティブスピーカーに通じるかどうかを試してみる機会を提供することにつながる。子供たちは英語を実際に使ってみる喜びを味わうことができ、またそれは何よりの動機付けとなる。日本人の英語教員が授業の支援をする場合は、そういった意義はやや薄れてしまうが、発音の仕方などで注意してほしい部分や子供たちが表現したい英語表現を紹介し、伝えることなどは、難しくはない。

振り返ると、授業後に十分な授業の振り返りの時間を持つことも難しかった。しかし、課題は種々あるが、小学校の学級担任とともに少しでも一緒に何かやったときに振り返る時間を共有すれば次の活動にもつながり、数ある課題も少しずつ解決していくと予測する。

(1) よりよい連携のために

連携を進めるにあたって、まず戸惑ったのは、小学校英語の目的や方針、学ぶ内容のポイントが高校とかなり異なっていることであった。実際、小学校の授業に参加する時間を作ることはできたが、授業内容を考えたり、授業案を作成したりするところまでは実施できなかった。そのため、まず、安易に協力する形をとるのではなく、どういった目的のものかを知った上で、今回のように、小学校側の主導の下に授業の計画をして実施するのが、連携の第一段階であるのかもしれないとの感触を持った。

将来的に十分な連携を行うためには、中高の教員が一つの小学校を担当し、その小学校の教員とカリキュラムを考え、年間の授業を計画するところから始めるといったことも必要かもしれない。年数回訪問するだけでは、高校教員の特性を十分に活かすことはできないと思われた。年間の計画に沿って、小学校教員が中高の英語科教員のアドバイスを気軽に受けながら授業を進めていき、中高の教員が何回か訪問授業のような形で実際に支援参加することは可能であると思われる。それぞれの小学校で、このようなアドバイザー的存在の中高の英語科教員を担当協力員として位置付け、お互いの関係を築けば、三校種での連携を図りながら進めていく可能性も広がり、大変有意義であると思われる。

吉原高校では、支援の依頼があれば研究後も協力する余地はある。英語に対する取組が進みつつある小学校で求められるのは、特にALTの訪問や支援を増やすことが有効であると思われる。そのためにも、ALTのサービスや交通手段の問題等を解決することも視野に入れながら、様々な可能性を探る必要がある。

(5) まとめ

ア 成果として

外国語活動が小学校で必修となることに伴い、起こりうる問題点について、小中高の教員が協力して解決方法を模索し、既存の概念にとらわれることなく、創造的に実践を試みたところに、本研究の意義があったと思われる。まず、第一の成果は、多様な手段を講じることで、小学校教員が抱えている「教師自身の英語力に対する不安」という高い壁を乗り越えることに対して、一筋の光を見いだしたことである。教師のための英語タイム、校内研修での英語活動の授業や教材の紹介、中学校教員を講師とした夏季研修、中高の教員も参加した授業実践、このような地道な取組と経験を積み重ねることで、教師もまた学習者であることを実感し、完璧な英語に対するこだわりが消えていった。子供と驚きを共有する感性と好奇心、柔軟な吸収力と豊かな表現力を持つ小学校教員こそ、英語活動に携わるのにふさわしいと思われた。第二の成果として、児童生徒にも教員にも多くの出会いと可能性をもたらした人的交流が挙げられる。高校所属で日本に来たばかりの ALT、国際科の高校生、中高の英語科教員などを迎えて行われた授業は、生徒に「伝え合う」ことへの切実な学習動機を与えた。そこには、真剣に、生き生きとコミュニケーションに取り組む子供たちの姿があった。

小学校の学級担任にとって、1時間の英語活動を準備するには、かなりの労力を要する。授業構想、英語表現、発音についての疑問や授業のサポート等、小学校教員を支援する体制作りができたことは、大きな力となった。また、中高の教員にとっても、英語の学びの出発点で、楽しく活動する子供たちとかかわることは、「分かり合うために、言葉や表現方法を学び、分かり合おうとする態度をはぐくむ」という指導の原点を引き継ぐことを意識する機会となった。最近では、中学校区の小中合同研修、10年研修、英語教員の資質向上のための研修等で、交流が抵抗なく行われる環境が整いつつある。実際、研究校に限定されない異校種間の教員交流もあり、英語活動を通して、人の輪がダイナミックに広がっていくことを予感させた。

イ 課題として

連携の研究として、いくつかの課題も残った。まず、連携が有効な手段であっても、身近な同僚への浸透が難しいことである。特に、小学校英語活動の授業はまだ発展途上であるため、校内で共通理解を図ることに苦労した。研究協力員のコーディネーターとしての活躍や、校長のリーダーシップに依存するところが大きいのも事実である。次に、連携を通常の勤務状態で実施するには、時間的にも、服務上も、また高校と義務教育の学校の違いなど、様々な制約が伴うことになる。事前の打合せや事後研修が十分だったとは言い難い。また、中高の英語科教員への負担増や校務の多忙化を招くことになった。中高の英語科教員がアドバイザーとなって各小学校を担当する等のシステムを整備する場合には、時間割の弾力的な編成や対応すべき点等、課題が多い。今回はほとんど実施できなかったが、本テーマを踏まえた中高連携も重要課題である。

ウ 最後に

今後も研究協力員同士の絆を大切にして、TT や校内研修へのかかわり等を継続させていきたい。また、研究協力員は、他の学校に研究成果を広めるという新たな役割を担うことになる。さらに、行政による支援についても検討の必要があると考える。

3 事例報告（掛川地区）

(1) はじめに

ア 研究の概要

掛川市は、東西約 15 km、南北約 30 kmの南北に長い地域で、公立小学校 23 校、公立中学校 9 校、県立高校 4 校がある。平成 3 年度から「保・幼・小・中一貫教育推進事業」が実施されており、中学校区毎に学校公開を中心とした研修会を行い、異校種間の連携が図られてきている。また、平成 18 年度から市内の一中学校区が、静西教育事務所指定小中連携研究実践校として指定され、職員交流を行ったり合同研修の機会を設けたりして研修を進めている。

英語活動については、県総合教育センターによる研究協力校への ALT 講師派遣や、市 ALT の学校訪問等を生かして、学校ごとに工夫を重ねているが、実施状況には差があるのが現状である。平成 17 年度「小学校英語活動実施状況調査」によると、英語活動実施校は 17 校、指導方法の打合せ実施校は 3 校であった。また、平成 18 年度は英語活動実施校 23 校、指導方法の打合せ実施校は 6 校という状況である。

掛川市には ALT が 5 名所属しており、通常は中学校英語指導助手として担当中学校に勤務するほか、担当中学校区の小学校と幼稚園の訪問、小学生対象の「夏休み・楽しい英語教室」などを行っている。これは、平成 14 年度から児童・教員・ALT が英語を通じてコミュニケーションする場として、夏休みの 3 日間を使って希望者に対して行っているもので、今年度の参加者は延べ 300 名を超え、年々希望者が増加している。

平成 18 年度、市の指定により中央小学校が英語活動の研究を進めることになり、さらに本研究の協力校にも指定された。中央小学校と西中学校は同一学区で、近隣の掛川東高等学校には、中央小学校・西中学校卒業生が在籍する。この 3 校が研究協力することで、児童生徒にとっての魅力ある英語教育のための連携の可能性を探った。

イ 研究協力校の概要

(ア) 掛川市立中央小学校

市の中心にある大規模校。新興住宅地等を抱えるため、児童数の増減の変化が激しく、帰国・外国人児童も在籍している。英語活動については、この数年間特別非常勤講師も配置され、総合的な学習の時間の中で行ってきた。研修テーマを「自分の思いを表現できる子」の育成とし、「BIG EYES , BIG VOICE , BIG ACTION」の 3 つの「BIG」を中心に、「楽しい活動・感じる体験・行動に移す場面・気づく体験」を英語活動に取り入れ、校内カリキュラムの作成や、E (English) ルームの設置、E タイム、模擬授業の実施などを通じて、英語活動の充実に努めている。

(イ) 掛川市立西中学校

中央小を卒業した児童が入学する中学校。中央小とは、児童生徒の情報を交換する小中連絡会や生徒指導連絡会などで連携を図ってきた。一斉研修会や「保・幼・小・中一貫研修会」で授業公開を実施してきたことを考慮して、教員同士の交流を生かした研究を進めることとした。

(ウ) 静岡県立掛川東高等学校

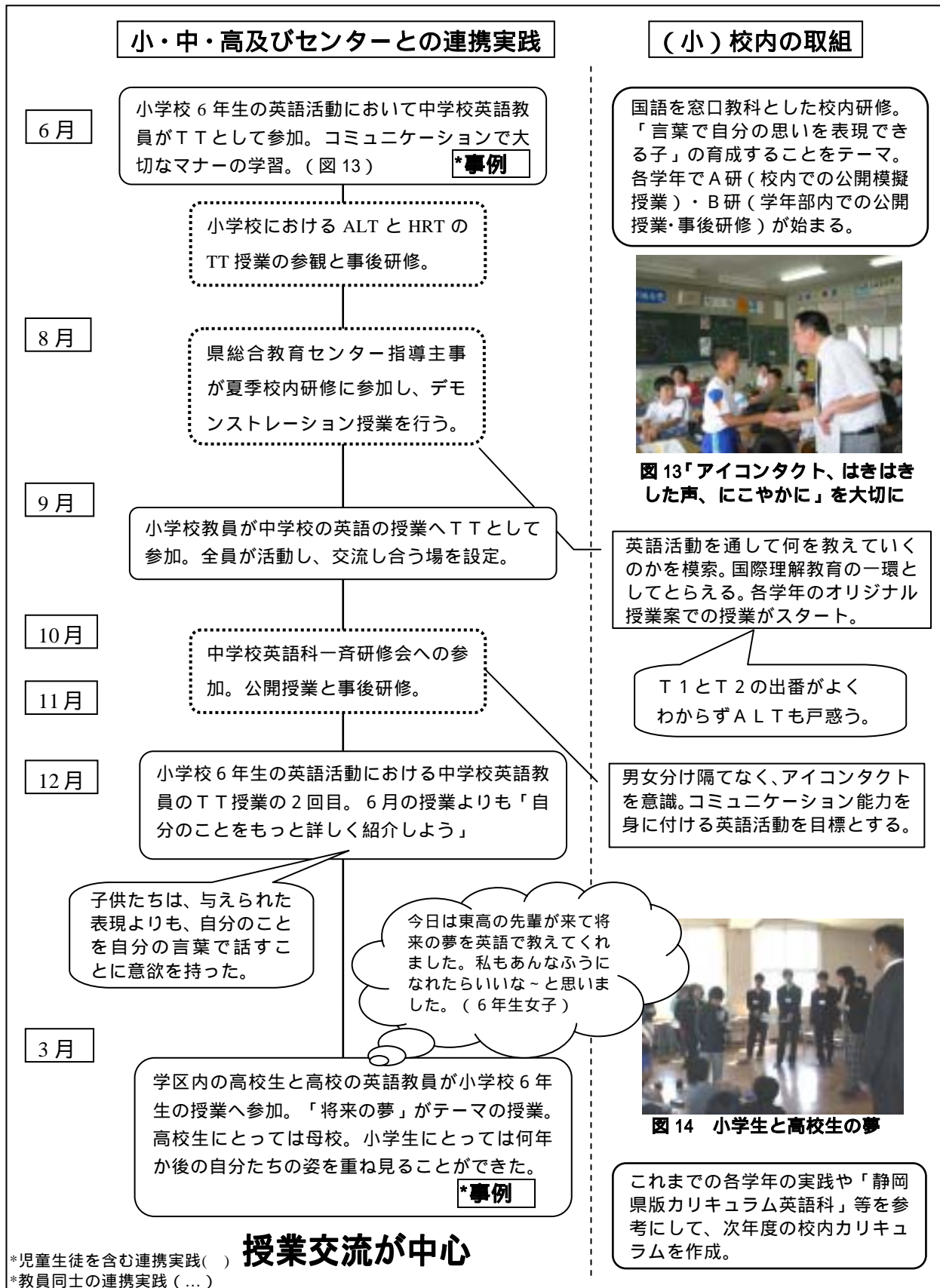
進学指導に力を入れており、西中学校からの進学希望者が多い。特進クラスに中央小卒業生が複数在籍するため、児童と生徒の交流を生かした研究を進める。

(2) 研究の経過報告

ア 1年目の取組

掛川地区の研究協力校3校が行った連携実践と小学校内の取組を表6にまとめた。

表6 2年間の連携実践一覧(掛川地区1年目)

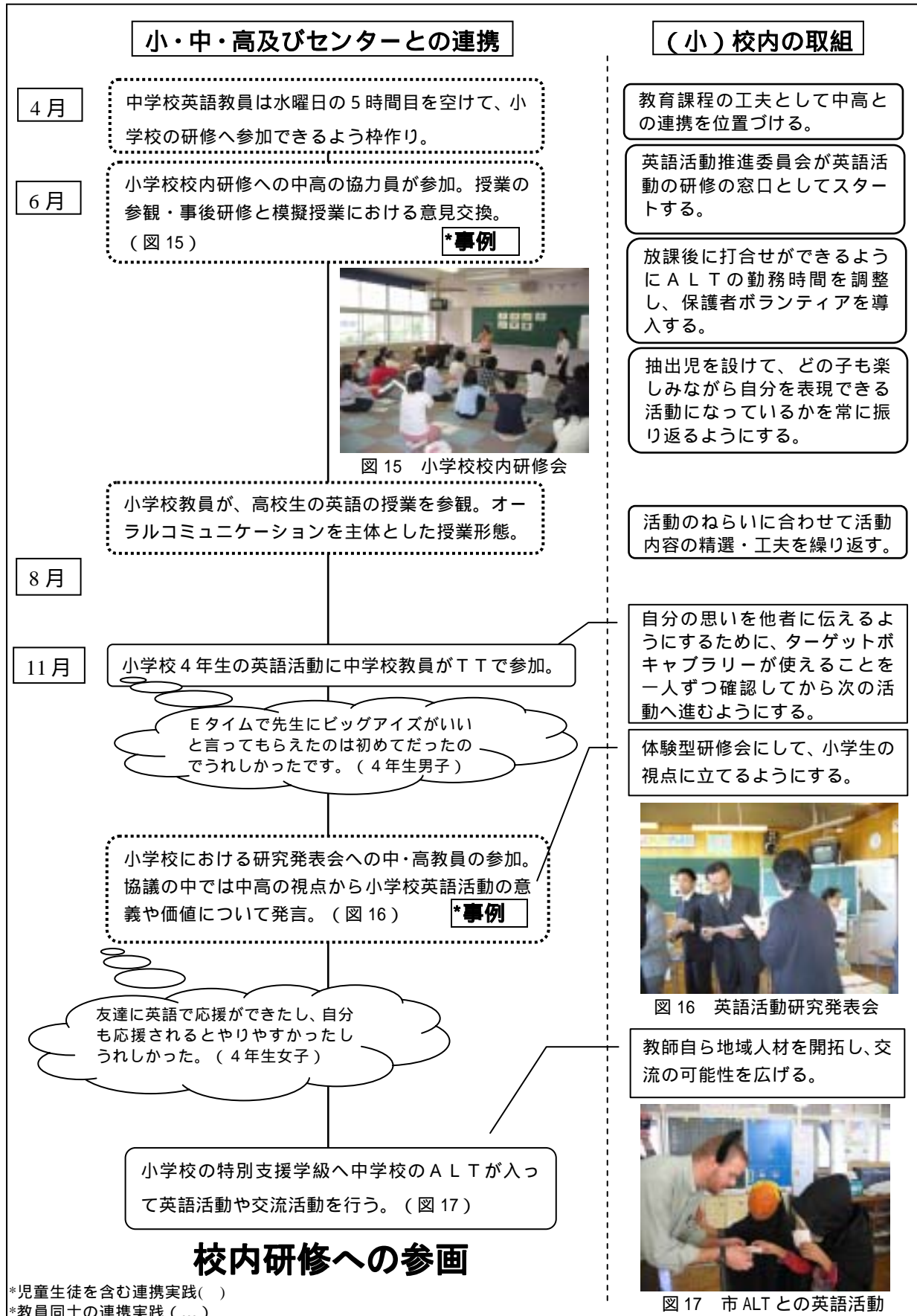


授業交流が中心

イ 2年目の取組

掛川地区の2年目の取組も1年目同様に、表7としてまとめた。

表7 2年間の連携実践一覧（掛川地区2年目）



校内研修への参画

*児童生徒を含む連携実践()

*教員同士の連携実践(...)

(3) 小学校英語の取組実践

ア 研究協力校の英語活動（中央小）

(ア) 英語活動の目標と付けたい力の設定

小学校の英語活動は、まず「楽しいこと」が大切であり、中学校英語の前倒してはないと考える。そこで、試行錯誤の1年目は、いろいろな言語体験をさせて興味・関心を喚起することを目標にした。2年目の目標としては、ねらいに合わせて授業内容を絞ること、子供に合わせた指導方法を工夫すること、そして英語活動を通して生じる交流（ふれあい）と、そこで生まれる他者への思いやりの心を育てることに重点を置いた。

活動を設定する時は、常に、何のための活動か、これを通してどのような力を子供たちに付けさせたいのかということを追求してきた。具体的には、図 18 のように、「言葉で他者と関わることを大切にし(Big Voice)」、「心の目を開いて聞き(Big Eyes)」、「自ら他のものやことに関わろうとする (Big Action)」子供の育成を目標とした。これらは、子供たちの心に自尊感情や他者を大切にする感情を培っていくことにつながる。すなわち、全人教育的な要素を含んでいると言ってもよいだろう。

(イ) 成果（子供たちの変容）

最初は身構えていた子供たちも、次第に臆することなく英語を使うようになっていった。普段消極的な子が、進んで発言するようになり、英語以外の活動の授業でも積極的に取り組む姿が見られるようになった。これは、ALT に褒められたり、自分の英語が通じる喜びを味わったりすることで自信を得たためであると考えられる。また、外国への興味や関心が高まり、世界の人々と積極的にかかわろうとする態度も芽生えてきたこともうかがえた。これは、英語活動へのさらなる動機付けともなるものである。



図 18 掛川市立中央小学校 学校教育目標及び英語活動研究テーマ

イ 研究協力校(小)の校内カリキュラム

掛川市立中央小学校では、表8のような年間計画の下で英語活動を行った。

表8 平成19年度 英語活動(ハロー・イングリッシュ)年間指導計画表

	ひかりのぞみ	1年	2年	3年	4年	5年	6年
4月	あいさつ Hello 1	自分の名前と あいさつ Hello My name is ~ Nice to meet you. 1	元気にあいさ つ 名前はなあに What's your name? 1	あいさつしよ う Good morning/after- noon Good bye//See you Have a nice day. 2	いろいろなあ いさつ 元気かな How are you? I'm ~. 2	あいさつしよ う 人の名前や様子 をたずねよう What is his/her name? His/Her name is ~. He/She is ~. 2	あいさつし合 おう 今日の気分は great, fine, sick, hungry 2
5月	友だちにな ろう My name is~ Nice to meet you. 1	数字で遊ぼう 1~10 1	数に親しもう 1~31 1	それなあに What is it? It's(color) It's(fruit) 2	誕生日はいつ 四季・12ヶ月 When is your birthday? It's (month / day) in(season) 2	好きな食べ物 は何? What food do you like? Which do you like? 3	今日の曜日は What day is it? Sunday ~ Saturday 1
6月	英語で歌 おう ABC 1	色で遊ぼう red, blue, light blue, purple, pink, green 1	体を動かそう eye, nose, ear mouth, head shoulder leg, knee, toe 1	好きなものを 伝え合おう1 (くだもの・色 ・動物) What ~ do you like? 3	色と形 circle, square triangle, yellow rectangle blue, red 2	いろいろな国 Japan, France, America What country? It is(). 2	あなたの好きな ものは? What() do you like? color fruit, sport,subject 4
7月	七夕まつり Tanabata wish, star, 4	体を動かそう eye, nose, ear mouth, shoulder leg, knee, toe head, 1	野菜の名前 okura, soybean, corn, tomato, cucumber, eggplant greenpapper I like ~. 1	好きですか? Do you like ()? Yes/No 1	七夕かざりを 作ろう(色、 形) Please. Here you are. Thank you. You are welcome. 1	いろいろな色 What color? Red, please. 2	たずねてみよう What season do you like? How old are you? When is your birthday? Where are you from? 5
9月	英語で遊 ぼう 1, 2, 3 How many ~? steps 1	私の家族 mother, father brother, sister grandmother grandfather 1	曜日と天気 Sunday,~ It's sunny, 1	これ、なあに? What's this? This is(). 2	好きなものは 何? I like(). How about you? Me, too. 2	出身はどこで すか? Where are you from? I am from(). 3	1年生と英語で 遊ぼう 絵本の読み聞か せ・歌・踊り・ 劇・ゲーム 4
10月	ハロウィン sweet 1	ハロウィン パーティー sweet, candy 1	ハロウィン を楽しもう sweet,candy, chocolate 1	ハロウィン trick or treat 1	ハロウィン Peek-a-boo Guess who? trick or treat 2	どこにあります か? Where is America? Here. 3	ふるさとを紹 介しよう There is () in Kakegawa. It is famous for(). 3
11月	収穫祭 Thanks- giving day 食べ物の 名前 5	アニマルラ ンドを開こう lion, monkey rabit, snake elephant penguin 1	くだものを買 いに行こう lemon,orange, Here you are. Thank you. You are welcome. 1	中央小の周 りを紹介し よう Wath's this? This is(). 4	友だちを応援 しよう Are all right? Come on, you can do it. Try again. Great! 4	さそってみよ う。 Let's play(). May I help you? 4	Kid's E タイム を 放送しよう クイズ番組 英会話教室 歌・踊り 英語劇 4
12月	クリスマス Christmas card 1	クリスマス パーティーを しよう Christmas tree present, star 1	クリスマス を楽しもう tree, present star 1	クリスマス プレゼントに ほしいもの What do you want? I want~. 2	クリスマスに ほしいもの This is for you.Really? Thank you! 1	遊びを紹 介しよ う。 This game is (). 3	クリスマスの 話 食べたいもの 飲みたいもの Would you like()? 2
1月	お茶会 tea, please 1	じゃんけん遊 び rock, scissors paper 1	福笑いをし よう eyes,nose,ears, head,shoulder 1	好きなものを 伝え合おう2 (乗ってみたい な) I like 乗り物。 2	一緒に遊ぼう Let's play(). 福笑い righth, left, up down 1	福笑いをし よう。 up, down, right, left 4	性格を表現し よう brave, gentle, careful 自分 について話そう I am ~. I'm (not) good at ~. 4
2月	発表会 1	動いてみよう walk, run, jump sing, sit down turn around stand up 1	誰でしょう Who is this? This is 友達。 ~ is my friend This is my 家族 1	好きなものを 伝え合おう3 (得意なスポ ーツ) I can (sport). 2	静岡県お国 じまん(有名な もの) Look! What's this? This is(). 2	どこへ行くの? Where do you want to go? 3	わたしの夢 My dream. I like(). I want to be a (職業) 2
3月	感謝の会 1	くだもの banana, apple orange, melon grape 1	世界のあい さつ Sawaadi Bonjour Kutaa 1	まとめ ・自分の好 きなもので自己 紹介活動など 1	まとめ ・英語で表現 してみよう 1	まとめ ・英語劇 3	感謝の気持ちを 表そう 3
	18	11	11	20	20	35	35

*繰り返し取り入れたい表現 Hello. Hi. Nice to meet you. How are you? I'm ~. See you. Thank you. You are welcome. Please. I see. Sure. No problem. Are you OK? OK. Wow! You are good! Good! Great! Nice! I'm sorry. Excuse me. I like ~. Do you like it? Yes. No. I like ~. I can ~. Can I ~? Can you ~? I have ~. Who Where What When How How many ~? How much? What's time is it now? What's the date today? How old are you? Are you finished? Let's ~. I want ~. How do you say ~ in English? What's the weather like?

ウ 中学校との連携（西中）

(ア) 中学校教員とのチームティーチング（事例：扱う内容への配慮）

1年目の6月と12月に掛川市立西中学校の教員が、中央小を訪問し、T2として学級担任との授業に2回参加した（図19）。まず、事前打合せで、中央小が目指す英語活動の在り方を確認した。英語を通してのコミュニケーションを重視しているため、初対面であるということを活用し、表9のように、自己紹介をテーマに指導案を考えた。第1回、第2回ともに教師が自己紹介のいくつかの例を実際にやって見せることで、どのような点に気を付けるべきかを明確に提示することができた。子供たちのアンケートからは「中学校の先生と話ができて嬉しかった」、「目を見て話せた」など、努力した点が数多く書かれた。第2回の授業の前には、家で自分の趣味や特技を英語で何というのかを調べてきた子供も多く見られ、関心の高さがうかがえた。普段接することのない中学校教員に自己紹介をするという設定が、子供のモチベーションを高めることになり、誰もが生き生きと活動に取り組むことができた。



図19 教師によるデモンストレーション

表9 ティームティーチングの授業内容 活動1～3が第1回、4～6が第2回

テーマ	英語で分かりやすい自己紹介をしよう
活動1	「中学校教員の自己紹介を聞いてみよう」 簡単な英語による自己紹介を聞き、どんな人なのかを考える。
活動2	「教員同士の自己紹介を何パターンか聞く」 よかった点や直したい点、自分なりに工夫する点を見つける。
活動3	「相手に分かるように自己紹介をしよう」 声の大きさ、スピード、アイコンタクト、握手などを意識して話す。
活動4	「自分の特徴を言えるようにしよう」 趣味や特技などをI like ~.などを使って言えるようにする。
活動5	「英語で言えなかった時にどうするか考えよう」 ジェスチャーなどを使い、何とか会話を続けるようにする。
活動6	「6月よりも、もっと詳しく自分のことを知ってもらおう」 実際に中学校教員に英語で自己紹介を行う。

(イ) 授業参観や研修会を通しての交流（事例：相互の指導や指導法を経験）

西中学校英語科教員が中央小の授業を数回参観し、校内研修会にも参加した。また、中央小学校の教員が、「小笠地区一斉研修会」で中学校の授業を参観し、さらに「掛川市保幼小中一貫研修会」で、中学校でチームティーチングの授業を行った。中学校教員が小学校の授業を実際に参観し研修会に参加することで、英語活動の計画を立てたり準備をしたりする段階での苦労を身近に感じることができた。それと同時に、普段中学校で英語を教えている立場から、クラスルームイングリッシュの重要性や、言語の使用場面（必要感のある活動）などについての助言を受けた。さらに、小学生が目を輝かせて英語活動に取り組んでいる様子を見ることで、中学校での授業でもコミュニケーションを行う喜びを生徒に感じさせることの可能性と必要性を中学校教員に伝えることができた。お互いが相互にかかわることで見えてくるものがたくさんあり、異校種間交流の意義を強く感じた。

エ 高等学校との連携（掛川東高校）

(7) 児童と生徒の交流（事例）

掛川東高校2年生9名が、1年目の3月に母校である中央小6年2組の英語活動の授業（表10）に参加した。さらに参加した高校生へのアンケートも実施した。

表10 授業の概要及び生徒アンケート結果

テーマ	My Dream ~広い世界へ~（45分間）
活動1	「Do you have a dream? 高校生のお兄さんお姉さんの夢を聞く」 卒業生の言う職業を聞き、自分の興味ある職業を考える。（全体）
活動2	「I want to be a... 自分の意見を伝え、友達の意見を聞く」 小学生は意見交換をし、高校生は活動の補助をする。（グループ）
活動3	「まとめ 学級単位で個々の夢を確かめ合う」（全体）

<p>参加した高校生のアンケート（抜粋）</p> <p>(質問1) 小学生の英語はどうでしたか？</p> <ul style="list-style-type: none"> ・かなり予想以上だった。（0人） ・予想をやや上回った。（1人） ・まあこのくらいであろう。（7人） ・予想をやや下回った。（0人） ・期待はずれであった。（0人） <p>（その他）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・スペルが書いて驚いた。 ・自己紹介は分かるようで、簡単な英語は知っていた。 ・先生の質問に英語で答えていて驚いた。 ・個人差がかなりあった。 ・英語の会話よりも日本語の会話が多かった。 <p>(質問2) 小学校の英語活動をどう思いますか？</p> <ul style="list-style-type: none"> ・早期から英語に触れるのはよいことだ。 <p style="text-align: right;">(↑)</p>	<p>（↓）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・中学で急に英語が始まると混乱するのでよい。 ・英語はこれから大切になる。時代の流れだ。 ・ゲーム感覚で遊びながら学ぶのならよい。 ・悪いことではない。 ・よい取組だが、正直大変そうだ。 <p>(質問3) あなたが小学生と英語活動をするなら、どんなことができそうですか？</p> <ul style="list-style-type: none"> ・身の回りのものを用いたビンゴ等のゲーム ・簡単な会話 ・よく使う単語を教える。 <p>(質問4) 小学生の時、英語活動をしましたか？</p> <p>（複数回答可）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・小6で授業があった。（8人） ・塾（2人） ・英語学校（1人） ・通信教育（1人）
--	--

このように、小学生と同窓生である高校生の交流は、双方にとって有益であった。英語活動そのものを深めたばかりではなく、小学生は憧れの世界に到達するための手段として英語を認識し、また高校生にとっては、この体験を通して自分史を振り返り、普段の英語学習の意義を確認することにもなった。



図20 小学生の夢と高校生の夢

(1) 教員の交流（事例）

数回にわたって、小・中学校及び高等学校の教員が相互に授業を参観し相互理解を深め合った。具体的には、高校の教員が小・中学校授業の参観をし、また掛川市指定の中央小学校研究発表会等に参加した。また一方で、小学校の教員が高校の授業を参観し、小笠掛川地区の中高英語連絡協議会に参加した。児童生徒の交流と同様に、このような教員間の情報交換も大変有益であった。授業を参観し合うことで児童生徒の実態や、異校種の実情がよく理解できた。また、小学校での研修会や職員会議、授業のプラン立てに参加してもらったことも連携を強めることになった。今後、高校の諸会議への小・中学校教員の参加が実現すれば、連携がより一層充実すると思われる。

(4) 異校種間連携に対する意見及び考察

ア 小学校からの視点で

(7) 中学校・高校との連携の成果

中高の英語教員による授業参観、チームティーチング、また校内研修会への参加は、まず小学校教員にとって大きな支援となった。英語活動を進めるに当たって常に手探りの状態であったため、英語を専門としている教員との意見交換の場や助言を得る機会が持てたのは大変有益であった。特に、戸惑いながら使っていたクラスルームイングリッシュについて、小学校の学級担任が、ALT や子供たちの前で英語を堂々と使っていきることの大切さに気付かされたのは大変良かった。加えて、日本人の英語コンプレックスをなくしていくには、まず教員の姿勢と心構えが重要であるとの指摘を受けた。また、指導のヒントや細かな授業技術も参考になった。

つぎに、小学校教員として、中学校や高校の英語の授業を参観したり、参加したりしたことで、中学生や高校生の様子が分かるだけでなく、今の英語教育が、自分たちが受けてきたものとは大きく様変わりしていることが分かった。特に中学校では、暗記が重要であったかつての英語教育とは違って、ALT と会話をしたり、友達同士のインタビューやゲームを取り入れたりする内容になっており、コミュニケーション能力を高めるための英語教育になってきていることへの理解が深まった。

また、連携によって中高の教員に小学校が目指している英語活動への理解を図る機会とすることもできた。その過程で、「小学校から高等学校までを通して、どんな人間を育成していくのか。そのための小中高の役割とは」という視点から、小学校英語活動の目標をより明確化、焦点化して考えることができたとも言える。これらを通じて、同じ学区にある小中高の英語教育の見通しを持つことができたと考える。

(1) よりよい連携のために

一方で、連携を進めていく上での課題もこの過程で明確になった。交流授業や研修の時間設定をするのが大変難しく、電話やファックスでのやりとりはできても、直接の打合せは授業前の短時間でしかできなかった。小中連携の時間として、研究2年目に週に1時間、中学校の担当教員に空き時間が配当されていたが、行事や会議などと重なり、実際に使えることはごくわずかだった。その結果、打合せ不足で児童生徒の実態が把握しきれず、授業のねらいが達成できないことがあった。

今後、より充実した連携を実現するためには、まず連携のための体制を確立することが必要である。連携の担当者に打合せ等のための時間を確保するとともに、担当者だけでなく学校全体の取組としてとらえて、研修会などを積極的に設けていくことが求められる。さらに、小中高連携のためのカリキュラムを整備する必要があると思われる。特に、小学校の英語活動の内容が各学校に任されている現状にあって、同一中学校区の小学校同士が足並みをそろえたカリキュラムを組み、中学校区として取り組んでいくことが望ましい。そのためには、各学校内での調整と、行政レベルでの支援が必要になってくると思われる。小・中学校の指導内容がうまく連携することによって、例えば小学校での文字認識の導入がスムーズに行われたり、中学校での指導がより効率的に行われたりするのではないだろうか。また、児童生徒の交流が英語を学ぶことへの大きな動機付けとなることも期待できると考える。

イ 中学校・高等学校からの視点で

(ア) 教員の意識調査より

小笠地区の中学校英語教員(30名)と、掛川東高校の教員(25名)に小学校での英語教育についてのアンケートを行った。以下(表11)は、その回答をまとめたものである。

表11 小笠地区の中高教員アンケート(自由記述式)

Q1 小学校での英語の授業を見たことがありますか?	ある...9名	ない...46名
(授業を見て感じたこと)		
<ul style="list-style-type: none">・ 英語活動の意味を幅広くとらえ、特に表現する力を伸ばしている授業だと感じた。・ 素直に子供たちが英語を発して自然な感じがした。生き生きとした様子であった。・ 教員の熱意と児童のやる気に圧倒された。ALTの訪問回数も多く充実していた。・ オーラル中心の授業であった。コミュニケーションの基本を小学校の段階で学び身に付けることは、人権教育にも通じるよい取組だと思う。・ 週1回なので定着度は低いが、小学生は英語の授業を楽しみにしている様子である。・ 十分に英語活動の趣旨を理解できないまま、不安な中で必要に迫られてやっている教員も多いのではないだろうか。英語活動の指針を理解することが大切だと思った。・ 児童は楽しそうに参加しており、英語嫌いの多い高校生とは全く逆の表情をしていたが、そこから何を学びとったかは疑問に感じる。		
Q2 小学校での英語教育に「期待する点」「心配する点」は何ですか?		
「期待する点」()の中は回答数		
<ul style="list-style-type: none">・ 英語に慣れ親しみ、英語の楽しさを味わえる。(18)・ 発音、イントネーション、リスニングなど音声面の指導ができる。(8)・ アルファベットとローマ字の定着度が高まる。(8)・ 文法ではなく、会話(音)から入ることで自然な会話ができる。(8)・ 海外、外国への理解と関心が高まる。(5)・ 意見を伝えること、人と意見が違うことを肯定的に考えられるようになる。(1)		
「心配する点」()の中は回答者数		
<ul style="list-style-type: none">・ 国語力の低下、また他教科への関心が薄れる恐れがある。(13)・ 早期からの英語嫌いを生み出さないかという心配がある。(11)・ 英語活動の格差(小学校間、公立私立、地域)が拡大するのではないか。(7)・ 小学校教員への負担、教員の指導力、教員が確保できるのかが心配である。(7)・ 目的や内容の共通理解が図られておらず、文法指導に走らないか。(5)・ 楽しいだけで終わってしまわないかが心配である。(3)・ 小学校と中学校の連携がしっかりできるか。(2)・ 保護者の受け止め方が様々である。(2)		
Q3 小学校で英語を学んだ生徒を受け入れる際に、中学・高校で気をつける点は?		
<ul style="list-style-type: none">・ 小中高の連携をしっかりと行い、指導の継続性を持たせる。(12)・ コミュニケーションの楽しさを感じられる授業を行う。(6)・ 「聞く、話す」活動と「読む、書く」活動のバランスをとる。(7)・ 生徒の個人差が現在よりも拡大することが予想されることへの配慮。(6)・ 英語嫌いになった生徒への配慮と、英語嫌いを作らないようにすること。(3)・ 英語以外の教科の充実を図る(日本のことへの学習を深める)こと。(2)		

以上の結果から分かるように、多くの教員が異校種間連携の重要性を認識しているが、小学校での英語活動の授業を見た経験のある教員は少なく、必ずしもそのねらいや活動内容を理解しているとは言えない。今後、小学校で英語を学んだ生徒が中学校や高校に入学してくることを考えると、まず小学校でどのような活動が行われているかを知ることが第一である。さらに、教科研修会等に小学校の教員も参加し、研修交流を行って情報及び意見交換を進めることで共通理解を図り、同一中学校区内の小学校がある程度同じねらいで活動を行うことが望ましい。その結果、中学校や高校入学時にどのような生徒が入学するのも事前に把握でき、小学校間の差も広がらないようになると思う。小学校では音声中心に授業が行われており、思い込みで中学校側が文字に関する指導を期待するのも問題があると思われる。それよりも、コミュニケーションの楽しさを感じている生徒の気持ちを大切に受け入れる授業改善が中学校には求められており、4技能のバランスを考えながら入学時の導入の方法についての研修を深める必要性を感じる。

(4) 生徒の意識調査より

西中学校と掛川東高校の生徒に対して、小学校での英語教育に関するアンケートを行った。生徒の内訳は、中学校は1年から3年までの各1クラス、高校は1年から3年までの各2クラスである。質問は、(1)「小学校での英語の学習をどのように思うか」、(2)「自分が中学校に入学する以前に英語の授業を受けたことがあるか」、(3)「自分が小学校の英語活動を支援するとしたらどのようなことができると思うか」の3点である。

(1)の質問に対して、「よいことだ」と答えた生徒は、中1から高3まで、それぞれ、71%、76%、47%、61%、67%、73%であった。「小学校で単語等を覚えておくと楽である」、「小学校で学習していないと中学校で大変である」と答えた生徒を含めると、肯定的に考えている生徒はもっと多かった。逆に、「必要ない」と答えた生徒は、中1では0%、一番多かったのは高1のクラスで27%であった。次に、(2)の質問に対して、小学校での授業が初めての習う英語だった(中学校や塾ではなく)と答えた生徒は、高3は9%であったが、学年が下にいくほど増加し、中1では42%にのぼった。これは、小学校の英語活動が近年広がりを見せており、この地区では特に現在の中1から小学校の英語の授業が一般的になったことを示している。(1)の質問への回答と合わせて考えると、小学校で英語の授業を受けたことで、英語に対する否定的な態度が生まれるという傾向はあまり見られない。むしろ肯定的に考えている傾向のほうが強いという結果がでている。

さらに、(2)で、中学校で初めて英語を学習したと答えた生徒に対して、もっと早く英語を学びたかったかどうかを尋ねたところ、学年が進行するにつれて、中学校からでも十分だと答えた生徒が多かった。小学校から英語を始めた生徒については、「よかった」「楽しかった」と答えた生徒の数が、「難しかった」と答えた生徒を上回った。(3)については、小学校英語活動を支援するために自分ができそうなこととして「アルファベット、発音、単語を教える」、「会話を行う」などの回答が多かったが、配慮すべき点として、「優しく分かりやすく教えてあげる」をあげた生徒が最も多かった。

中学校や高校での指導をより効果的に行うためには、生徒たちが入学以前にどのような英語教育を受けてきているかを理解することが必要である。このアンケートを通して生徒の実態を多少なりとも把握できたと感じている。特に、今回対象となった生徒のうち、中学校で初めて英語を学び始めた生徒は、高校生では半分程度であったが、中3と中2では3分の1程度になり、中1ではわずかに1名であった。この点からも、中高の教員が小学校の英語活動の内容についての知識を深め、スムーズな連携を実現するために、より効果的で効率よい授業の展開を図っていく時代が身近になったと確認された。

(5) まとめ

ア 連携の成果

本研究の協力校の小学校における英語活動においては、英語表現の習得を中心とするのではなく、子供の表現力と他とかかわる力の向上をねらいとしてきた。相手の気持ちを思いやって声をかけるというコミュニケーションの基本を押さえて指導することで、子供たちは、英語活動を通して自己表現の楽しさを体験すると同時に、よりよい人間関係を築くことができた。その結果、学校が楽しいと感じる子供の割合が増え、出席率が高まったとの報告も受けている。このことは、教員についても言えることである。英語活動に学校全体で取り組むことで、教員の間でより円滑なコミュニケーションが行われることとなった。これは、英語活動が学校のなかに、ある種の文化を創り出したのだとも言える。

英語科における小中高の連携を実施する際にまず考えるべきことは、現状においては、

中学校や高校による小学校の英語活動に対する支援である。小学校で英語活動がスタートしたばかりで、英語を専門とする教員が小学校にはごく少数であるという事情を考慮すると、それは当然のことである。本研究においては、中高の教員が小学校の授業を参観し、また校内研修会に参加して、様々な助言を行ってきた。それによって、教材と教授法の研究が進み、より効果的な指導が可能になった。また、小学校教員が英語そのものについての知識と理解を深めることができ、教室で使う英語に対して自信を付けることができた。

しかしながら、連携による恩恵を受けたのは小学校教員ばかりではなかった。小学校の校内研修で、職員が一丸となって英語活動の研究に取り組む姿とその熱意に、中高の教員は圧倒される思いであった。児童にとって魅力的な英語活動を作り出すことに参加することで、中学校や高校において自分たちが行っている英語の授業そのものを見直すきっかけとなった。また、小学生への音声面の指導が効果的であることなど、小学校英語活動の利点と可能性を認識することができた。さらに、児童生徒にも、より幅の広い学びの場を提供することになった。高校生の訪問を受けて、小学生は自分の将来像を描ききっかけとし、高校生は小学生に英語を教えることで自分自身の英語学習を振り返ることができたことは大きな成果である。

イ 課題

これまで考察してきたとおり、小学校で英語活動を行うに当たって、地域の中学校や高校と連携していくことには大きな効果が期待できる。しかし、もう一方で、連携のための時間を調整することが難しく、出張等の手続きや段取りも大変だったことも事実である。これを改善して、それぞれの学校全体で連携を深めることができるように、年間研修計画に位置付けたり、時間を確保したりするなどして、引き続き体制を整えていく必要があると感じた。また、連絡を密に取りやすくするため、既存の「小中連絡会」等を活用したり、連携を中心に進める学年体制を作ったりすることも、連携強化の助けになると考える。

前述したように、中高の教員は小学校の英語活動に対して様々な懸念を持っている。その中には、より多くの情報を得たり、実際に英語活動に触れたりすることで解消できるものもあると考える。この点からも、この研究の成果を校内外に広め、研究の成果を生かしていけるようにすることが必要であると感じている。

研究「中間報告」としてのまとめ

1 2年間の事例研究

本研究は、公立小学校が今後、英語が必修の形で導入されることにより、非常に大規模な対応を迫られることを予想し、まず現状にあるものを利用して何ができ、何ができないか、また、それがどの程度かを探ることを第一の目的とする。その機軸は、児童生徒の学習体系からも、小学校がスタート地点であり、小学校の取組が進むことで、その後へつながる中学校や高校が従来の英語教育をどのようにとらえ直し、学校英語教育の連携を実現できるかも視野に入れている。そのため、中高の英語教員がどこまでかわれるかの問いも併せて追究した。

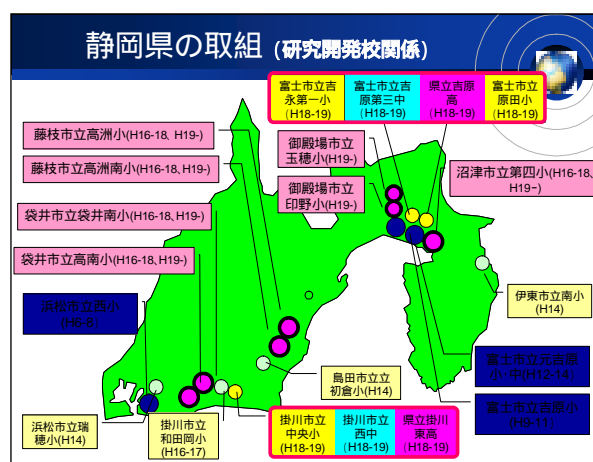


図 21 小学校英語関係の国・県関係での研究校

2 成果と課題

「富士地区」と「掛川地区」の取組は、図 21（前ページ）で示したこれまで国や県の指定を受けて小学校英語の研究を進めてきた中でも、特に「連携」を研究テーマの中心に据えている。公立小学校英語の実際の姿は、地域や学校単位でかなり異なり、今後の協力体制を考える上でも、小学校の数の多さからも、基本的に「地域連携型」が有効である。

今回、研究協力校同士の自由な発想で「異校種間連携」をとらえ、小学校英語への対応を軸に地区毎で連携の可能性を探った結果、図 22 で示す動きが確認された。これは、2 年間の 2 地区の共通項を取り出し、 から へとつながっていく矢印の流れで図式化したものである。なお、小学校の担当や組織が急速に変化して行ったため、その部分が大きな比重を占めている。

また、程度の差こそあるが、「富士地区」は、本研究以前にあまり、あるいは全く英語活動を取り上げていなかった小学校を、「掛川地区」は、英語活動の取組にどちらかという興味があった学校をスタートに発展した連携のネットワークである。そのため、今後近隣校との協力体制を考える際のシミュレーションのためにも多少なりとも本図が参考になることを期待する。身近でありながら今まで無かった関係の構築に利用してほしい。

特に、次のような点は今後の取組を考えていく上でも注目したい事項である。まず、一定期間、「小中高連携」という新たな視点を意識して課題解決に取り組むことで、自校組織の見直し（特に小学校は他校との協力体制を構築するために自校整備が加速）及び共通目的を共有した全く新しい地域連携型の異校種間組織作り（中学校や高校も新しい教育を受けた児童生徒の姿を連続して間近に確認でき、校種を越えた共通の学習者を伸ばす教育への取組が可能）が進み、各校種での教育活動の対応の幅や発想が広がる。

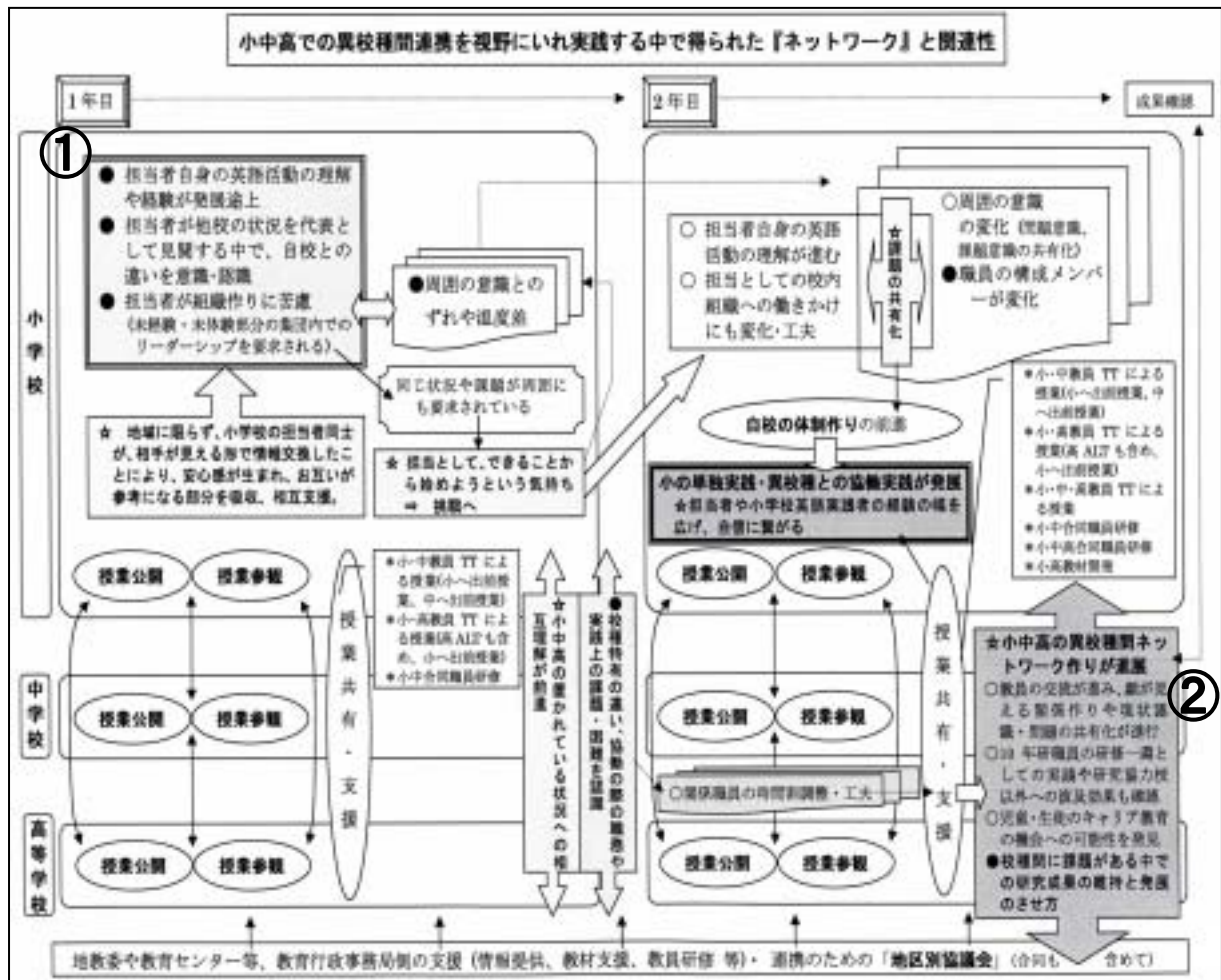


図 22 「富士地区」及び「掛川地区」の事例研究から得られた共通する連携の姿

次に、「授業公開」「授業参観」等、まず相互に門戸を開いて現状把握から始めることが大切であるが、それに終始せず、そこから何を一歩踏み出すかを検討協議し、お互いがメリットのある形で協力した取組に発展させることが大事である。事実、「出前授業(異校種の教員によるTT・児童生徒間交流)」「校内研修参加」などを進めることで、異校種の置かれている状況や相違点を確認して課題を自分のものとすることができた。それと同時に自分たちに返ってくるものの大きさや大切さも認識できた。

ただし、異校種の教員が交流して実践する「人的」連携は、職務に関する規定等で自由に移動して活動することは難しく、現状システムでは相互の学校間対応にとどまる。なお、研究2年目の取組に、関係職員の時間割調整などを各校が自主的に配慮することで、対応するための時間を作り出す可能性があることも確認された。そのため、これまで無かった協力のための相手を意識した対応策の創出の視点も、今後の対応を考える上で有効であろう。

3 今後の可能性

相互に利点が無ければ異校種間連携の取組も一過性で終わり、維持することは難しい。また、課題の理解や認識を共有するには、自校も他校も時間を要する。今回、「地区別協議会」は非常に有効に機能したため、地域にある既存組織、「連絡協議会」等も活性化することで、さらに取組の広がりを期待したい。

同時に、各組織に常に働きかけを維持する担当(連携コーディネーター)を置くことも、人的措置として、連携の発展強化に必要であると考え。大阪府吹田市や広島県呉市で報告されている小中連携の取組事例では小中兼務職員を配置して制度的に職員を確保しているが、簡単なことではないと想像される。

国の言語政策が進む中、連携の問題は、雑誌でも特集が組まれ、英語教育推進のために国の指定を受けたSELHi 高校でも、その75%が連携に取り組んでおり、内訳(図23)を見ると、10%以上が小学校との連携を

視野に入れて研究している。本県の中高の英語教員も図24のとおり、小学校英語への関心が年々上昇傾向にあり、連携の土壌は徐々に耕されている。今後、小学校での外国語活動(英語活動)実践のためにALTや外部講師とのTTが指導形態の基本と想定されているため、英語の専門性を持つ近隣の中高の英語教員が小学校の大きな課題の支えとなり、その後の教育の担当者としても力を発揮し、連携ネットワークに寄与することを期待する。

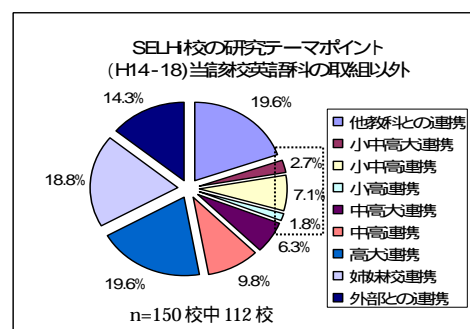


図23 SELHi校の研究領域(自校外連携)

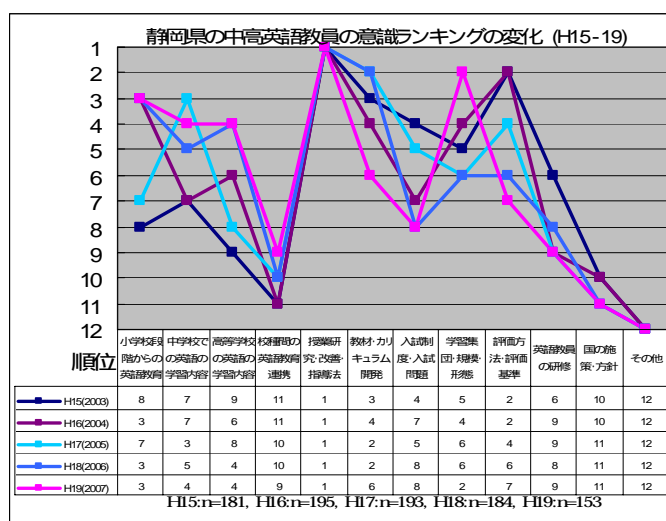


図24 平成15-19年度 県内中高の英語教員の英語教育における興味関心の高い領域(1位・2位回答)の動向

4 おわりに

これまで、校種の枠組みによって、教員には別々の児童生徒への指導を日々行っているという意識が一般的であり、目の前にいる対象者への視点のみにとらわれがちであった。しかし、

いつか出会う共通の指導の対象者(児童生徒)へ指導を行うという意識への転換が、この新たな時代の新発想の方策を実行するための原動力となり、様々な方策を有効に機能させるための鍵を握ると考える。その意味でも、7校の研究協力校には、管理職を始めとして窓口の研究協力員を中心に学校全体で時代先行課題に真摯に取り組んでいただいた。また、富士市及び掛川市教育委員会の協力もあって、地域連携型の視点から本テーマを掘り下げるために担当指導主事にも本課題を共有していただいた。このように今ある教育現場の力を発掘し、まず第一歩として眠っていた可能性を掘り起こす本研究に着手できたのも多くの方の御理解・御尽力があってのことで関係各位に厚くお礼申し上げたい。最後に、今回かかわったお互いが、顔の見える仲間として信頼関係を持ったネットワークを構築できたことに感謝する。今後もさらに研究を進め、有効な手だてを見いだし、多くの方の共有財産となることを目指したい。

【参考文献等】

- 『英語教育』編集部「英語教育 2007年5月号 第56巻 第2号,特集“英語教育の連携を考える”」大修館書店 2007
- 岡秀夫・金森強編著「小学校英語教育の進め方『ことばの教育』として」成美堂 2007
- 静岡県教育委員会「静岡県版カリキュラム英語科」2006
- 静岡県総合教育センター「平成14年度 研究紀要 第7号『小学校における英語学習活動に関する研究』」国際研修課 2003
- 静岡県総合教育センター「平成17年度 研究紀要 第10号『小・中・高等学校における学校英語教育の連携の在り方とその一貫性にかかわる研究 - 連携カリキュラムの作成を模索して - 』」研修研究部カリキュラム開発課(外国語教育) 2006
- 第3回全国小学校英語活動実践研究大会実行委員会「第3回全校小学校英語活動実践研究大会資料集,第2分科会テーマ『小中連携』」 2007
- 独立行政法人 教員研修センター・愛知県教育委員会・文部科学省「平成19年度 小学校における英語活動等国際理解活動指導者養成研修(ブロック別指導者研修/東海・北陸ブロック)」冊子 2007
- 広島県呉市立五番町小学校・二河小学校・二河中学校 編(天笠茂 監修)「公立小学校で創る一貫教育4・3・2のカリキュラムが拓く新しい学び」ぎょうせい 2005
- 文部科学省「中央教育審議会初等中等教育分科会」会議資料(9月25日/11月7日)2007・(1月17日)2008
- 文部科学省主催「英語が使える日本人」の育成のためのフォーラム2007/国際教育推進フォーラム2007」冊子 2007
- 文部科学省及び県「小学校英語活動実施状況調査結果」(平成15・16・17・18年度)2004・05・06・07

【研究組織】

	平成18年度	平成19年度
研究協力校(協力員)	<p>▶ 富士地区</p> 富士市立吉永第一小学校(渡辺 弥生 教諭) 富士市立原田小学校(佐野 恵子 教諭) 富士市立吉原第三中学校(藤澤 泉 教諭) 静岡県立吉原高等学校(京田 真弓 教諭) <p>▶ 掛川地区</p> 掛川市立中央小学校(城 方美 教諭) 掛川市立西中学校(池ヶ谷 将彦 教諭) 静岡県立掛川東高等学校(片岡 徹 教諭)	<p>▶ 富士地区</p> 富士市立吉永第一小学校(渡辺 弥生 教諭) 富士市立原田小学校(佐野 恵子 教諭) 富士市立吉原第三中学校(多々良 修 教諭) 静岡県立吉原高等学校(京田 真弓 教諭) <p>▶ 掛川地区</p> 掛川市立中央小学校(城 方美 教諭) 掛川市立西中学校(池ヶ谷 将彦 教諭) 静岡県立掛川東高等学校(片岡 徹 教諭)
助言者	富士市教育委員会学校教育課 指導主事 市川 清美 掛川市教育委員会学校教育課 指導主事 田中 克美	富士市教育委員会学校教育課 指導主事 市川 清美 掛川市教育委員会学校教育課 指導主事 田中 克美
研究担当所員	研修研究部長 植松 豊 カリキュラム開発課長 木村 功 指導主事 大内 壮俊 指導主事 鈴木 敬子 ALT Ashley Harvey	研修研究部長 木村 功 カリキュラム開発課長 勝田 敏勝 指導主事 鈴木 敬子 指導主事 石川 芳恵 ALT Michelle Chenard ALT Andrew Lagemann